

# 清水端遺跡

県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

1986. 3

明野村教育委員会  
峡北土地改良事務所

# 清水端遺跡

県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

1986. 3

明野村教育委員会  
峠北土地改良事務所

## 序

明野村は、茅ヶ岳の西南斜面に広がる、なだらかな傾斜地帯にあります、  
太陽と緑に恵まれたすばらしい自然環境の中に位置しています。

この様な環境に恵まれた明野村一帯には、縄文・弥生・平安等の遺跡が数多く存在し、特に平安時代には「小笠原の牧」として栄えて居りました。

此の度、県営圃場整備事業にともない、橋沢川周辺の清水端遺跡発掘調査を行いましたが、本村としましては、はじめての本格的な調査でありまして多数の出土品から縄文時代の遺跡であることがわかりました。

これによりまして、明野村の古代を解明する上にも、又貴重な遺跡と資料であります、私達祖先の歴史を探究するうえで、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められることを願って止みません。

本調査にあたりまして、多人な御協力を賜りました、県文化課、峠北土地改良事務所等をはじめ関係各位に深く感謝の意を表します。

昭和61年3月

明野村教育委員会

教育長 船 崑 敏 夫

## 例　　言

1. 本書は山梨県北巨摩郡明野村上手字小袖地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 本調査は、峠北土地改良事務所の委託を受け、明野村教育委員会が実施した。
3. 本書の作成に際し、遺物の実測、トレース、写真撮影、執筆および編集は宮沢が行った。
4. 石器の石質については河西学氏、また、石器の実測およびトレースの一部については保坂康夫氏の御協力を得た。記して感謝の意を表します。
5. 発掘調査および本書の作成にあたり、次の諸氏、諸機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。

奥山和久、小野正文、板本美夫、佐野勝広、信藤祐仁、末木健、塙原明生、中山誠二、長沢宏昌、奈良泰史、新津健、八巻与志夫、山路恭之助、米田明訓、境川村教育委員会、山梨県埋蔵文化財センター

6. 本遺跡より出土した骨片については、早稲田大学考古学研究室の金子浩昌先生に原稿を執筆して戴いた。
7. 本調査にかかる出土遺物・諸記録等については、明野村教育委員会が保管している。
8. 発掘調査組織

教　育　長	船窪 敏夫
事　務　局　長	新藤 武義
学校教育係長	雨宮 智博
社会教育主事	村田 茂
調　査　担　当	宮沢 公雄

9. 発掘調査および遺物整理作業参加者

伊藤さつき、伊東昭一、伊東千代美、上村博明、遠藤実、生山欣、五味さち江、五味省三、篠原紫歎、篠原広孝、篠原義雄、清水隆、清水みゆき、清水康史、閑勝、広瀬恵子、福田すみ江、福田哲也、福田浩、福田光子、細座七郎、宮川寛、水森広徳、横山隆、岸崎浩実

## 凡　　例

1. 掘図の縮尺は次のとおりである。  
住居址、ピット群  $1/60$ 、埋設上器  $1/20$ 、土器  $2/3 \cdot 1/3 \cdot 1/6$ 、拓本類  $1/3$ 、土偶  $2/3 \cdot 1/3 \cdot 1/6$
2. 遺構掘図のレベルポイントは特に表記のない限り、同一図面上では同一レベルであるが、全体としては統一していない。
3. ピット内の数字は確認面からの深さを表わす（単位cm）。

## 目 次

第 I 章	調査経過 .....	1
	第 1 節 調査に至る経緯 .....	1
	第 2 節 調査方法と経過 .....	1
第 II 章	遺跡概要 .....	3
	第 1 節 清水端遺跡の立地と環境 .....	3
	第 2 節 周辺の遺跡 .....	3
	第 3 節 時序 .....	3
第 III 章	遺構 .....	5
	第 1 節 住居址 .....	5
	第 2 節 埋設土器 .....	18
	第 3 節 ピット群 .....	19
第 IV 章	遺構外出土遺物 .....	21
	第 1 節 土器 .....	21
	第 2 節 土製品 .....	24
	第 3 節 土器底部 .....	25
	第 4 節 石器 .....	25
第 V 章	まとめ .....	39
附 篇	清水端遺跡検出の動物骨 .....	41

## 挿図目次

- |                    |                  |
|--------------------|------------------|
| 第1図 清水端遺跡と周辺の遺跡    | 第20図 第2号埋設土器実測図  |
| 第2図 清水端遺跡全体図       | 第21図 第2号埋設土器出土石器 |
| 第3図 第1・2号址平面図      | 第22図 ピット群平面図     |
| 第4図 第1号址平面図        | 第23図 遺構外出土土器1    |
| 第5図 第1・2号址エベレーション図 | 第24図 遺構外出土土器2    |
| 第6図 第1号址出土土器       | 第25図 遺構外出土土器3    |
| 第7図 第1号址出土石器       | 第26図 遺構外出土土器4    |
| 第8図 第2号址平面図        | 第27図 遺構外出土土器5    |
| 第9図 第2号址出土土器1      | 第28図 遺構外出土土器6    |
| 第10図 第2号址出土土器2     | 第29図 遺構外出土土器7    |
| 第11図 第2号址出土土器3     | 第30図 遺構外出土土器8    |
| 第12図 第2号址出土土器4     | 第31図 遺構外出土土製品    |
| 第13図 第2号址出土石器1     | 第32図 遺構外出土土器底部   |
| 第14図 第2号址出土石器2     | 第33図 遺構外出土石器1    |
| 第15図 第2号址出土石器3     | 第34図 遺構外出土石器2    |
| 第16図 第2号址出土土器5     | 第35図 遺構外出土石器3    |
| 第17図 第1号埋設土器平面図    | 第36図 土器実測図1      |
| 第18図 第1号埋設土器実測図    | 第37図 土器実測図2      |
| 第19図 第2号埋設土器平面図    |                  |

## 図版目次

- |      |  |
|------|--|
| 図版 1 | 1.遺跡全景 2.3.調査風景 4.5.第1・2号址全景 6.第1号址敷石状況                          |
| 図版 2 | 1.2.第2号址全景 3.第2号址炉址 4.5.第2号址敷石状況 6.第2号址丸石出土状態                    |
| 図版 3 | 1.石列除去後 2.ピット群全景 3.第1号埋設土器出土状態 4.第2号埋設土器出土状態 5.第1号埋設土器 6.第2号埋設土器 |
| 図版 4 | 1.2.第1号址出土土器 3.第1号址出土石器 4.5.第1号址出土石器拡大図 6～9<br>第2号址出土土器          |
| 図版 5 | 1～5.第2号址出土土器 6.第2号址出土石器  |
| 図版 6 | 1.第2号址出土土器 2.3.第2号址出土石器 4.5.遺構外出土土器                              |
| 図版 7 | 1～4.遺構外出土土器  |
| 図版 8 | 1～5.遺構外出土土器  |
| 図版 9 | 1.遺構外出土土器 2.遺構外出土把手 3.遺構外出土土製品 4～7 遺構外出土石器                       |

# 第Ⅰ章 調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

北巨摩地域では農業振興政策の一環として、圃場整備事業が行われているが、明野村においても昭和55年度より、県営圃場整備事業が行われている。昭和60年度には、明野村上手字清水端を中心とする3.1haが圃場整備事業対象となった。そこで、明野村教育委員会では山梨県埋蔵文化財センターに依頼し、昭和59年12月に試掘調査を実施した。

その結果、事業対象地域の一部より土器片等が出土し、本調査実施の必要があるとの報告を受けた。早急に山梨県教育庁文化課、県北土地改良事務所、明野村教育委員会の3者で協議した結果、工区のうち約3,000m<sup>2</sup>を対象とし、記録保存を前提として、本調査を実施することになった。

本調査は、事業主体者である県北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県教育庁文化課より補助金を受け、明野村教育委員会によって行われた。

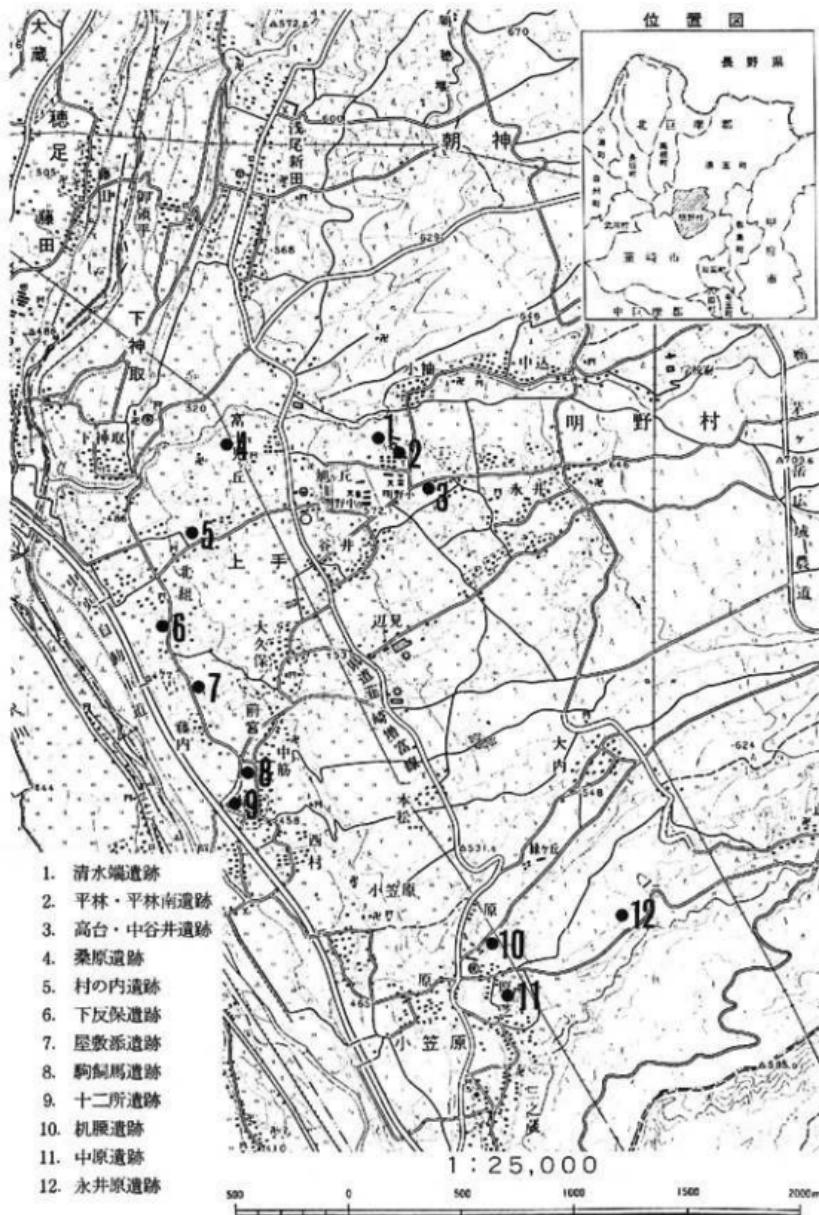
## 第2節 調査方法と経過

清水端遺跡の発掘調査は、昭和60年7月22日より開始し、同年9月10日まで実施した。調査予定面積は約3,000m<sup>2</sup>であったが、そのうちの2,850m<sup>2</sup>を調査した。表土を重機によって取り除いた後、人力によって遺構の有無を確認することとした。

調査区内に、南北にA～X、東西に1～26のグリッド(5m×5m)を設定し、遺構外の出土遺物についてはグリッドを単位として取り上げることとした。また、遺構内の出土遺物については全点主義を原則として取り上げた。

まず、調査区の北東部分について表土剥ぎを行い、精査を行ったが、出土遺物はあまりみられなかった。そこで、M-2グリッドを重機によって掘り下げたところ、黒色土層が2m以上堆積していたため、谷堆堆積物層であると考えられた。そのため、調査区北側での遺構発見は不可能と断定。

調査区南側では、S列より南側が台地の縁辺部に位置するようであり、調査区南側において遺構の確認に努めた。その結果、U-14、V-14グリッドでそれぞれ埋設土器が、U-17グリッドを中心として住居址2軒が発見された。また、遺構外からも数多くの土器、石器なども発見された。



第1図 清水端遺跡と周辺の遺跡

## 第II章 遺跡概要

### 第1節 清水端遺跡の立地と環境

明野村は、山梨県の北西部に位置し、茅ヶ岳が西南に向かって緩傾斜した広大な扇形状の裾野上に占地し、西には南アルプスの山々を一望することができる。村中央部を南北に茅ヶ岳広域農道が縱断し、西側一帯は河岸段丘によって塩川でさえぎられ、北は須玉町、南は韮崎市とそれぞれ隣接している。

明野村には塩川のような大河川ではなく、茅ヶ岳から放射状に河川が形成されているものの、そのほとんどは空沢であり、僅かに北部を湯沢川、中央部を橋沢川、南部を正樂寺川の小河川が東から西へ向かって流れているだけであり、伏流水の湧出する場所もあまりなく水量も少ない。そのため水田は塩川沿辺と上記の3河川を中心とした地域のみで営まれていたが、朝穂堰・上手堰・神取堰等の治水工事によって水田耕作可能地域も増え現在に至っている。

今回調査された清水端遺跡は、村中央部よりやや西部に位置し、近くを橋沢川が流れる。発見された遺構は台地が橋沢川へ向かって北に緩傾斜する台地の縁辺部に位置すると思われる。

### 第2節 周辺の遺跡

明野村は茅ヶ岳の西南麓を占め、数多くの遺跡のあることも知られている。特に茅ヶ岳の裾野の中程から先端部にかけて縄文時代中期を中心とした土器片がいたる所に散在している。昭和46年から51年にかけて山梨県教育委員会が行った分布調査では、26遺跡が確認された。そのうち25遺跡は縄文時代を中心とした遺跡であり、茅ヶ岳山麓が八ヶ岳山麓と同様に縄文文化が花開いた地であったことを窺うことができる。<sup>(1)</sup>

明野村において正式に発掘調査が行われたのは、昭和48年中央自動車道建設に先立って行われた早道場遺跡および西田遺跡だけであり、これらの遺跡からは遺物がわずかに出土したにとどまり、遺構を確認するには至っていない。<sup>(2)</sup>

清水端遺跡の周辺には縄文時代の遺跡が点在する。平林・平林南遺跡は村内最大規模と思われ、中期から後期にかけての土器、石器、土製品などが数多く発見されているが、学校・住宅等により大部分が破壊されている。またその南東には高台・中谷井遺跡がある。この遺跡も中期から後期にかけての上器・石器が出土しているが、特に曾利式期の大甕がほぼ完全な形で発見されている。出土遺物がほぼ同期であり、これら付近の遺跡との関連も注目されよう。

註 (1) 山梨県教育委員会『山梨県遺跡地名表』1979

(2) 山梨県教育委員会『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1975

### 第3節 層序

遺跡は、南から北への緩傾斜地の縁辺部に立地し、すぐ北側を橋沢川が流れている。その影

層によるものであろうが、調査区の北側と南側では土層の堆積状態に若干の相違がみられた。

第Ⅰ層 黒褐色土（耕作土）

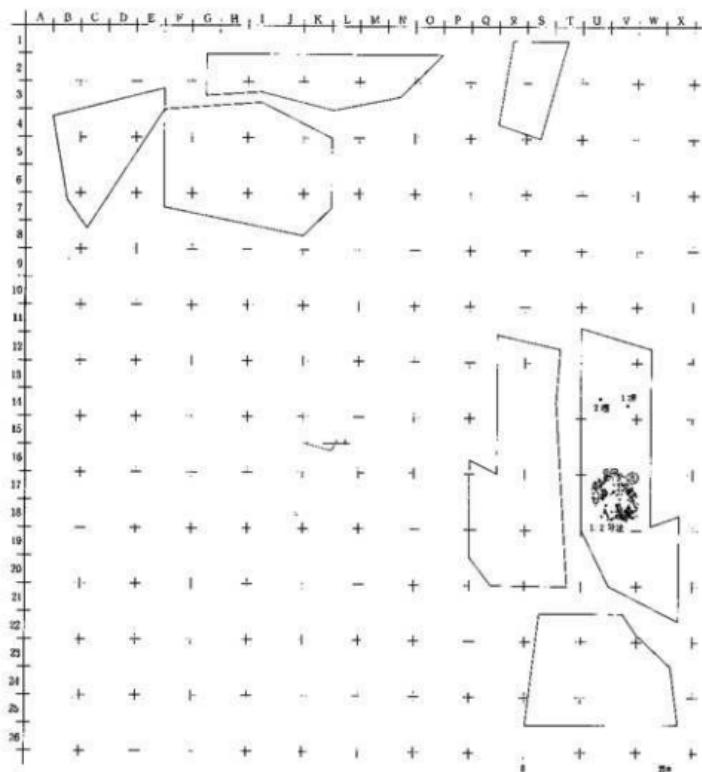
第Ⅱ層 黒色土

第Ⅲ層 暗褐色土

第Ⅳ層 褐色土

第Ⅴ層 乳褐色土

調査区南側の桑畑では第Ⅱ層が耕作土となっており、第Ⅲ層が縄文時代後期、第Ⅳ層が縄文時代中期の遺物包含層となっていた。調査区北側では、第Ⅲ・Ⅳ層の堆積はみられず、第Ⅱ層が2mほど堆積しているのが確認された。これは柄沢川の影響によるものであろう。第Ⅴ層は黒富士火砕流であると考えられる。今回の調査によって確認された遺構は、第Ⅳ層ないし第Ⅴ層より掘り込まれていた。



第2図 清水端遺跡全体図

## 第三章 遺構

### 第1節 住居址

#### 第1号址（第3・4・5図 図版1-4～6、3-1）

本址はU-17グリッドを中心とした地区に位置する。第2号址と重複するかたちで発見されたが、第1号址西側を掘り込んで第2号址が構築されていることから、第2号址が新しく、第1号址が古いものである。第1号址東側でピット内側に敷石が巡っていることから敷石住居址と考えてもよいであろう。しかし、前述したとおり第2号址によって破壊されており、現存する敷石部分の方が少なくその正確な内容は明らかではない。

炉、壁、周溝等は検出し得なかったが、ピットが西側で第2号址掘り下げ後にも確認され、これによってプランを推定することができる。主体部はほぼ円形を呈し、直径10.2mを測る。しかし、南側では調査の区域外にもかかり、ピットは確認されず不明な点が多いが、柱穴の配列状況から南側に張出部が延びる可能性はある。柱穴は全体に大形であり、深いもので1.4mを測る。柱穴は数が多く、重複もみられ、何度か改築された可能性はあるが、大形の柱穴はほぼ等間隔で並んでいる。

出土遺物は非常に少なく、覆土からの出土はほとんどみられなかったが、柱穴内より称名寺併行、堀ノ内I・II式期の上器および石器を数点出土した。

#### 土器（第36図1、第6図1～11）

第36図1は現存高7.4cm、口径15.6cmを測る。半截竹割によって弧状および直線文で木の葉状の文様を構成し、その内に綾衫状沈線文を配している。また、その外側は幾重にも描かれた弧状沈線文で満たしている。色調は黒色を呈し、焼成は良好である。その他、沈線を主文様とするもの（1～3）、磨消繩文を持つもの（4～7）、有刻の隆帶を持つもの（8・9）などがみられる。（10・11）は磨消繩文を持ち波状口縁を呈する深鉢形土器である。沈線が施された内面は盛り上がりを持つ。これらは中沖式に比定されよう。

#### 石器（第7図1・2）

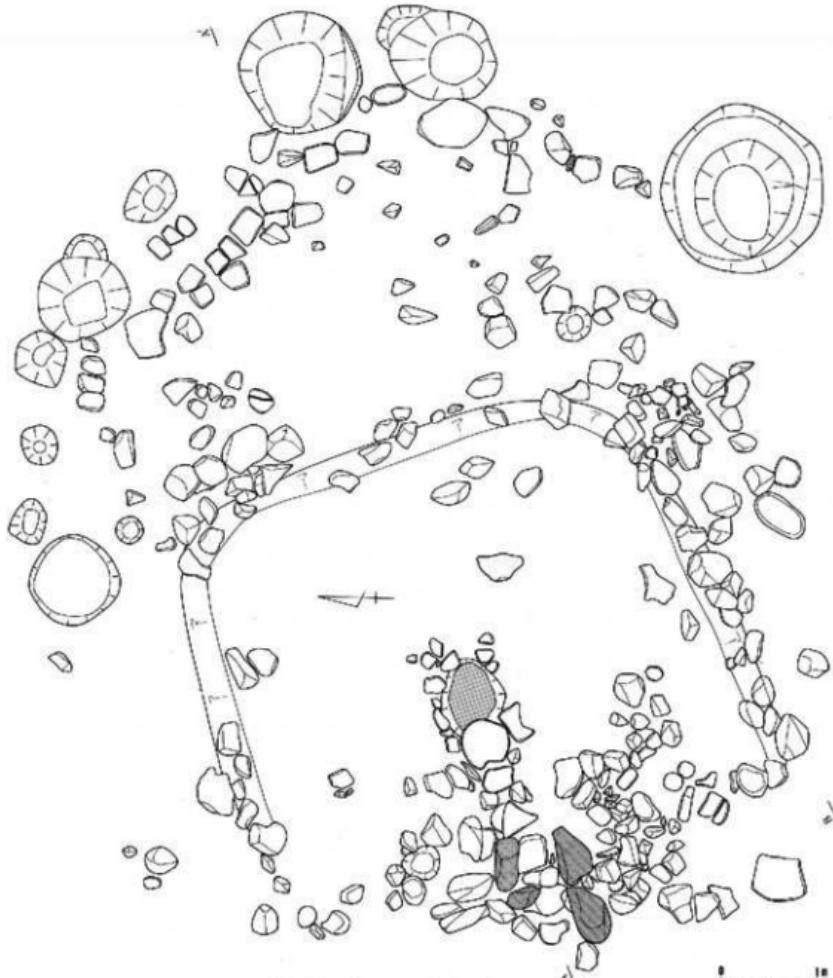
1は擦痕を有するものであるが、表裏面はその擦痕に方向性は持たないが、側面は一定の方向性を持っている。石材はチャートである。2は安山岩製の打製石斧である。

#### 第2号址（第3・5・8図 図版1-4・5、2）

本址はV-18グリッドから第1号址と重複して発見された。新旧関係については前述のとおりである。主体部は南北長5.5mを測る隅丸方形の堅穴であるが、西側では立ち上がりが確認できなかった。壁は北側で24cm、東側で17cmを測り、立ち上がりは比較的ゆるやかである。床面は軟弱な状態であり、検出が困難であった。主体部を取り囲むように立ち上がり部分より外

側に円環を用いた石列がみられ、東西7.1m、南北7.4mを測る。また竪穴内南側では石列が「L」字状に残存しており、竪穴内に石列が巡る可能性を残す。

炉址は平面的な石囲い炉で竪穴内中央部に位置し、長径76cm、短径68cm、深さ30cmを測る。焼土は炉内全面にみられ、また、骨片も多量に出土した。柱穴は、3本検出されたが、他には確認されなかった。炉址から外側へ平局な河原石が敷かれており、その両側には石が立てられ

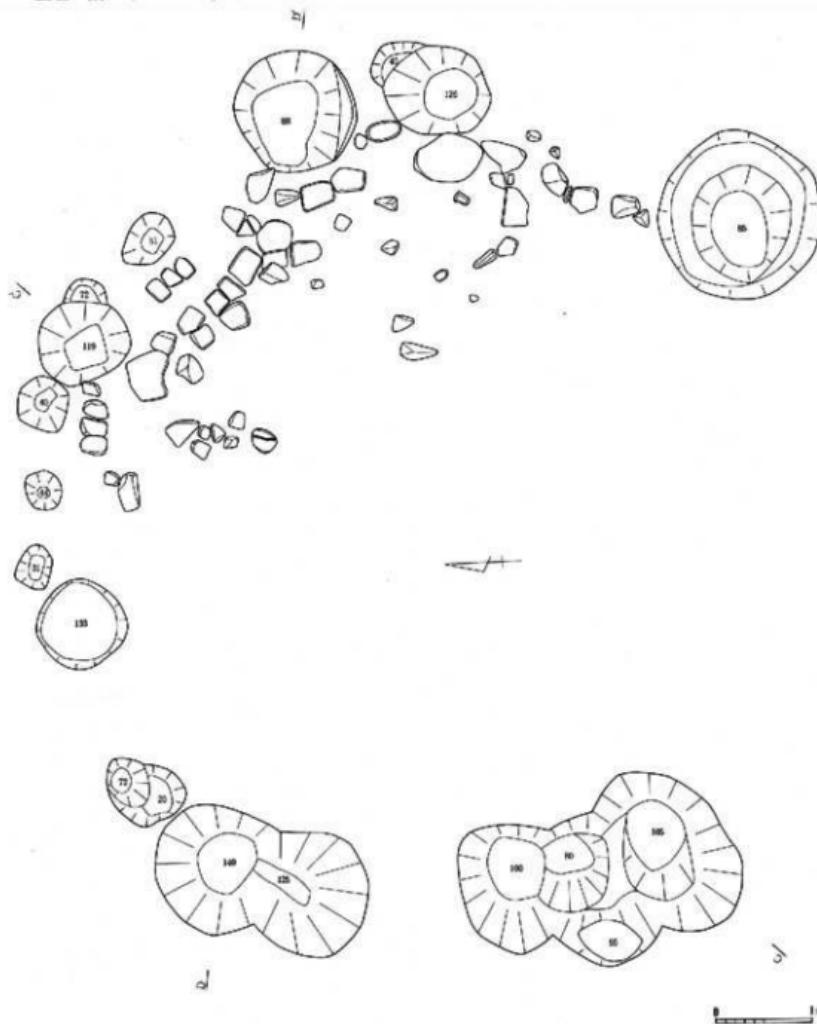


第3図 第1・2号址平面図 ( $S = 1/60$ )

ていた。この扁平な敷石が張り出し部として延びていた可能性はあるが、耕作で削平されており、明らかではない。また、両側西隅には丸石がそれぞれ配置されていた。

出土遺物は、完形品が1点しかみられないものの、加曾利B I～II式の土器を主体として多数出土した。

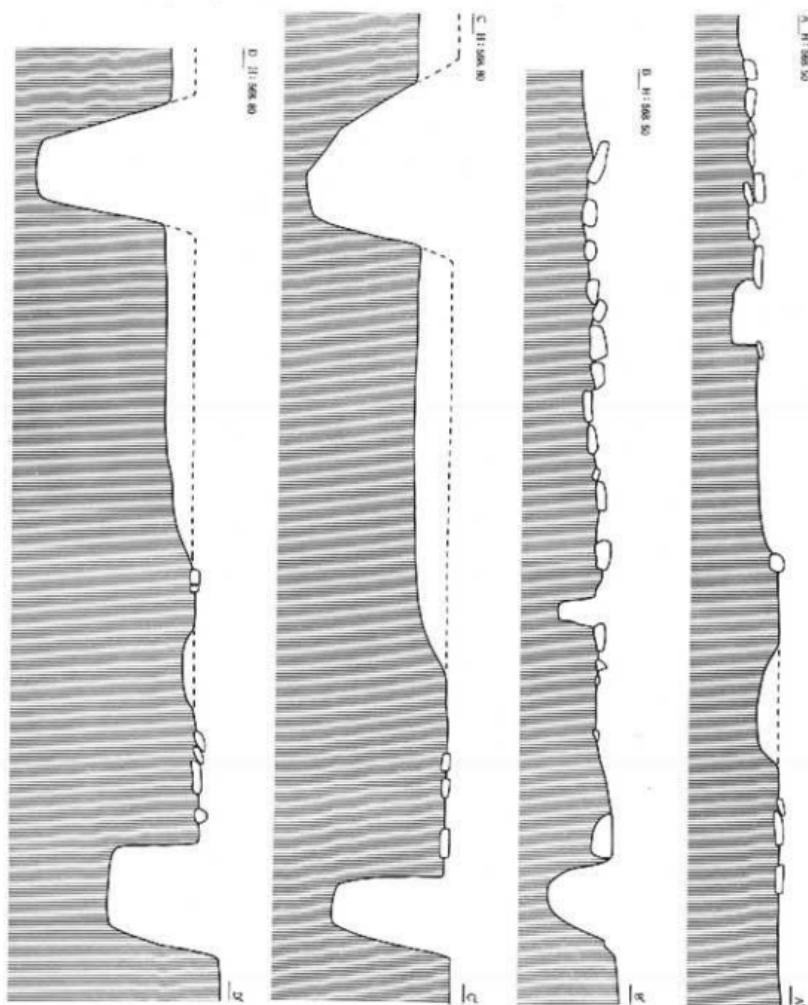
土器（第36図3～7、第37図1・2・4・5、第9～12・16図）



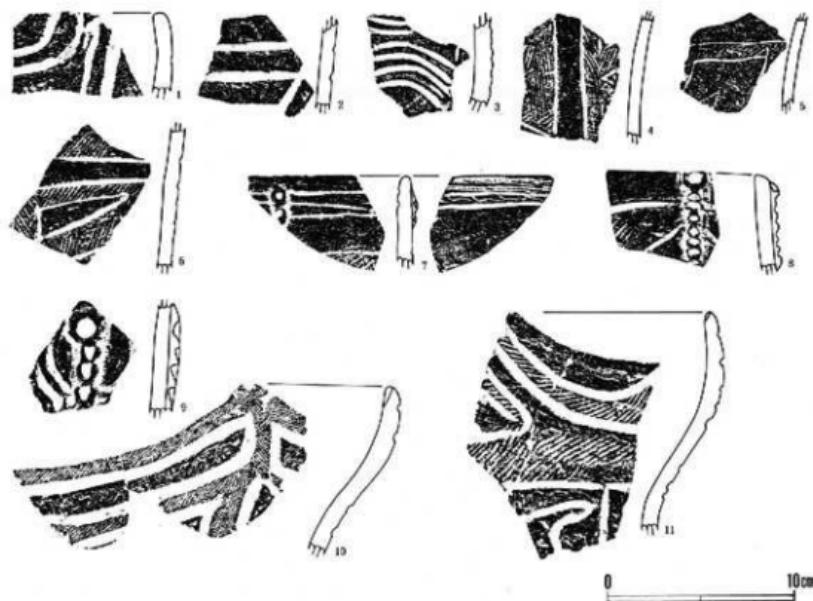
第4図 第1号址平面図 ( $S = 1/60$ )

第36図3は、口径13cmを測る深鉢形土器である。口縁部には4単位となるボタン状の貼付けがみられ、内面には一段の棱を有する。焼成は良好、色調は褐色を呈する。

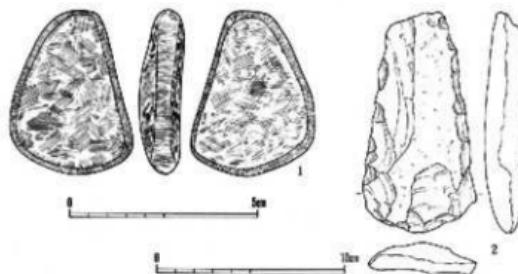
4～6は胴部に羽状沈線文を持つ深鉢形土器である。4は口径51cmを測り、2条の沈線を巡らせ、口縁部直下と上部沈線間に羽状沈線文を配している。内面には1段の棱を有する。焼成



第5図 第1・2号址エベレーショング (S = 1/60)

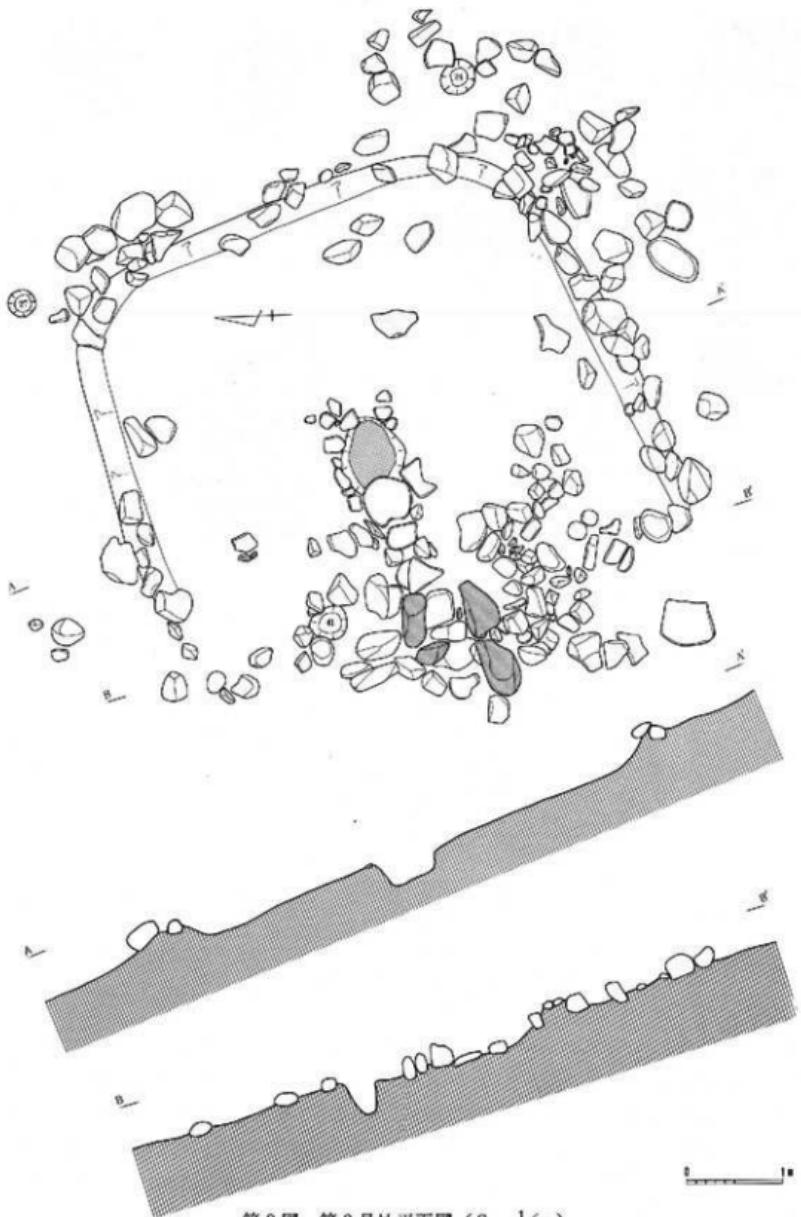


第6図 第1号址出土土器 ( $S = \frac{1}{3}$ )



第7図 第1号址出土石器 (1.S =  $\frac{2}{3}$ , 2.S =  $\frac{1}{3}$ )

は良好で内外面とも丁寧に磨かれている。色調は暗赤褐色を呈する。5は7単位の波状口縁を呈し、波底部には小突起が貼付されている。口径68cmを測る。4同様、口縁部直下と上部沈線間に羽状沈線文を配している。焼成は良好で、内外面ともに磨かれている。色調は黒褐色を呈する。6は口径59.6cmを測る。口縁部を無文帶とし、頸部に幅広の沈線を巡らせその直下に羽状沈線文を施している。羽状沈線文下には施文の目安のためであろうか、沈線文が巡らされていていたが、施文後に磨消されている。焼成は良好であり、色調は黒褐色を呈する。



第8図 第2号址平面図 ( $S = 1/60$ )

7は器高17.2cm、口径9.6cmを測る、台付の鉢形土器である。口唇部および口縁部直下の段部に刻目を有する。段部下に沈線が施され縦文帯をなし、胴屈曲部には2条の沈線が巡り、2段の刺突文が充填されている。その間隙を縱連対弧文を起点として横連対弧文が巡っている。また胴下半から脚部上半にかけて2条の沈線が巡り、縦文を配しているが、表面が磨滅しているために原体は不明である。色調は褐色を呈する。

第37図1は口径22cmを測る皿形土器である。内外面には赤色顔料が塗装されているが、文様を描いたものかどうかは残存状況が悪いため不明である。色調は黒色を呈する。

2は注口土器である。頸部および胴中位に磨消縦文を持った横帯文を施こし、その間隙に磨消縦文を持った入組文を配している。また胴屈曲部には刻文帯を巡らせ、その上に4単位となるボタン状の貼付けがなされている。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。

4は現存高28cm、口径38cmを測る粗製深鉢形土器である。口縁部頂部は山形に突起している。胴上半部には2条の弧線文を施こし、連結部には刺突と縱位の沈線を持つ。口縁部と対弧文間にはLRを原体とする縦文が施こされている。

5は口径44cmを測り、4単位となる波状口縁を有する深鉢形土器である。LRを原体とする磨消縦文を持つ横帯文間に縦連対弧文と磨消縦文が施された横連対弧文が配されている。口縁部頂部にはボタン状の突起が付されている。焼成は良好で、色調は暗赤褐色を呈する。

第9図1～10は縦文時代中期から後期前葉の上器である。

第9図11～13・17・19は横帯文を有する深鉢形土器である。

22・23は横帯文と対弧文の組合せによって施文された深鉢形土器である。

第10図1～5は斜線文・羽状沈線文を持つ深鉢形土器である。1は口唇部に刻目を有する。

6～8は格子目状沈線文を持つ深鉢形土器である。8は2本の沈線を巡らせ、3段の横帯文を形成する。1段目に斜線文、2段目は無文帯とし、3段目には格子目状沈線文を施す。また、内面口唇直下には1段の稜を有し、縦文を施こし縦文帯を形成させている。

9～16は体部が「く」の字状に内湾する「ソロバン玉」状を呈する深鉢形土器である。屈曲部に刻目を持つもの（9～11・13）、持たないもの（14・15）がみられる。肩部文様は弧線文を持つもの（14・16）、入組文風になるもの（15）などがみられる。

第11図1～5は縦線文が貼付される深鉢形土器である。全て1条ないし2条の縦線文が巡っているが、一部には縦位ないし斜位にも貼付されているものがある（3・4）。

6は内外面ともに集合沈線が巡る深鉢形土器である。

第9図14～16・20・21は横帯文を有する鉢形土器である。

第11図9～14は磨消弧線文を持つ鉢形土器である。弧線文連結部には垂線抱きの縦連対弧文がみられるものもある（9・10・13）。体部は横帯文や弧線帯が施されているのが発見される。

16・17は口縁部に帶状縦文を持つ鉢形土器である。

18は区切り交互弧線文の間に列点文を充填した鉢形土器である。

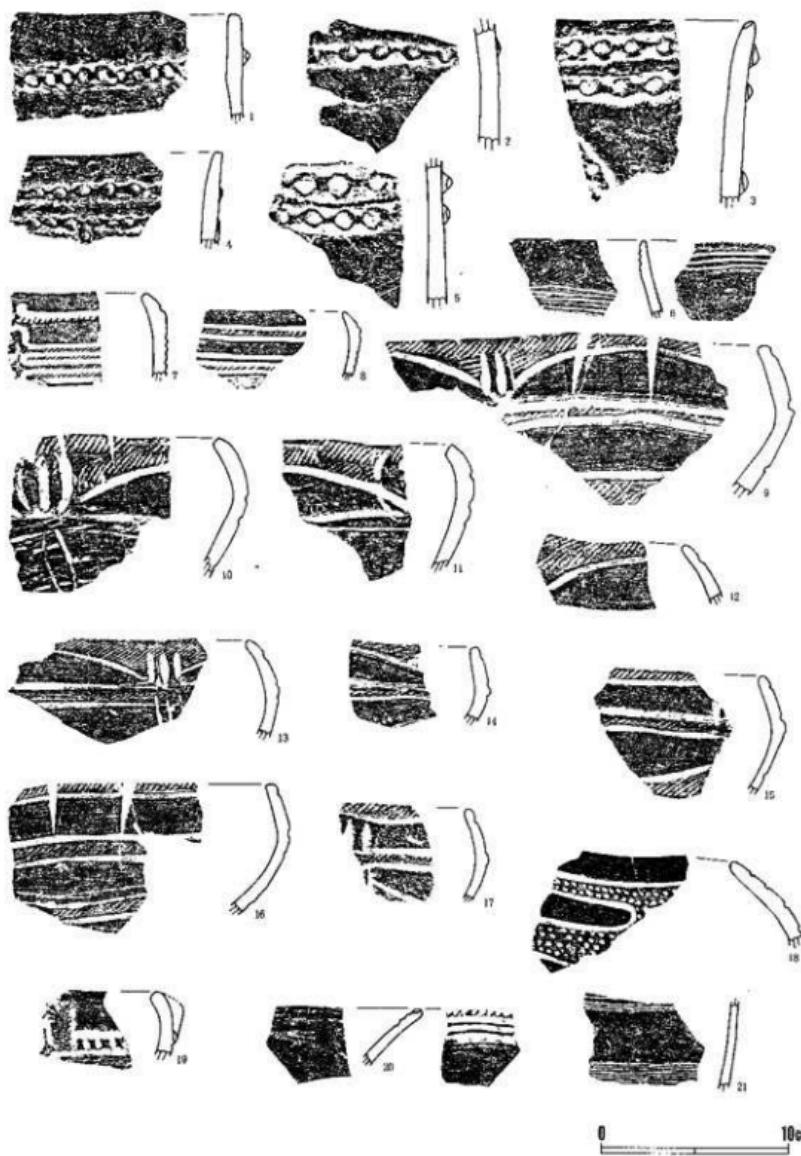
19は口縁部下に2条の横線を巡らせ、その間隙に刻目を施す鉢形土器であり、口縁部に小突起が貼付されている。



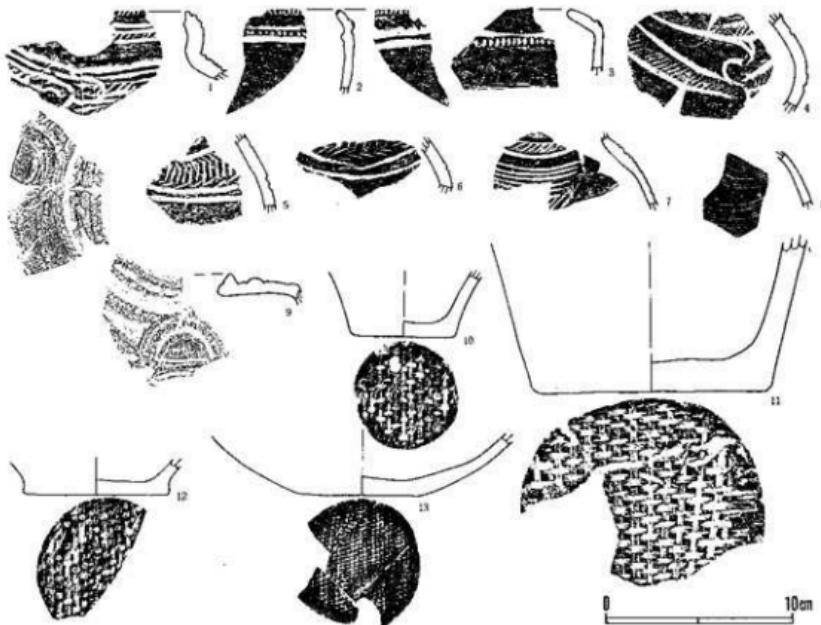
第9図 第2号址出土土器 1 ( $S = 1/3$ )



第10圖 第2號址出土土器 2 ( $S = 1/3$ )



第11図 第2号址出土土器3 ( $S = \frac{1}{3}$ )



第12図 第2号址出土上器4 ( $S = \frac{1}{3}$ )

20は外面が無文で内面に文様を持つ浅鉢形土器である。口唇部に刻日を有する。

21は小形土器である。集合沈線文を横位に施している。

第12図1～9は注口土器である。9は口縁部片であるが、口唇部に刺突を起点として沈線が巡り、沈線内に貝殻腹縁圧痕文が施される。肩部には半円形の隆帯が貼付され隆帯上には貝殻腹縁連続波状圧痕文がみられ隆帯に沿った沈線内には貝殻腹縁圧痕文が施文される。また、隆帯間には、刺突を起点とした沈線内に貝殻腹縁圧痕文を施文し、沈線間には貝殻腹縁連続波状圧痕文および刺突文がみられる。

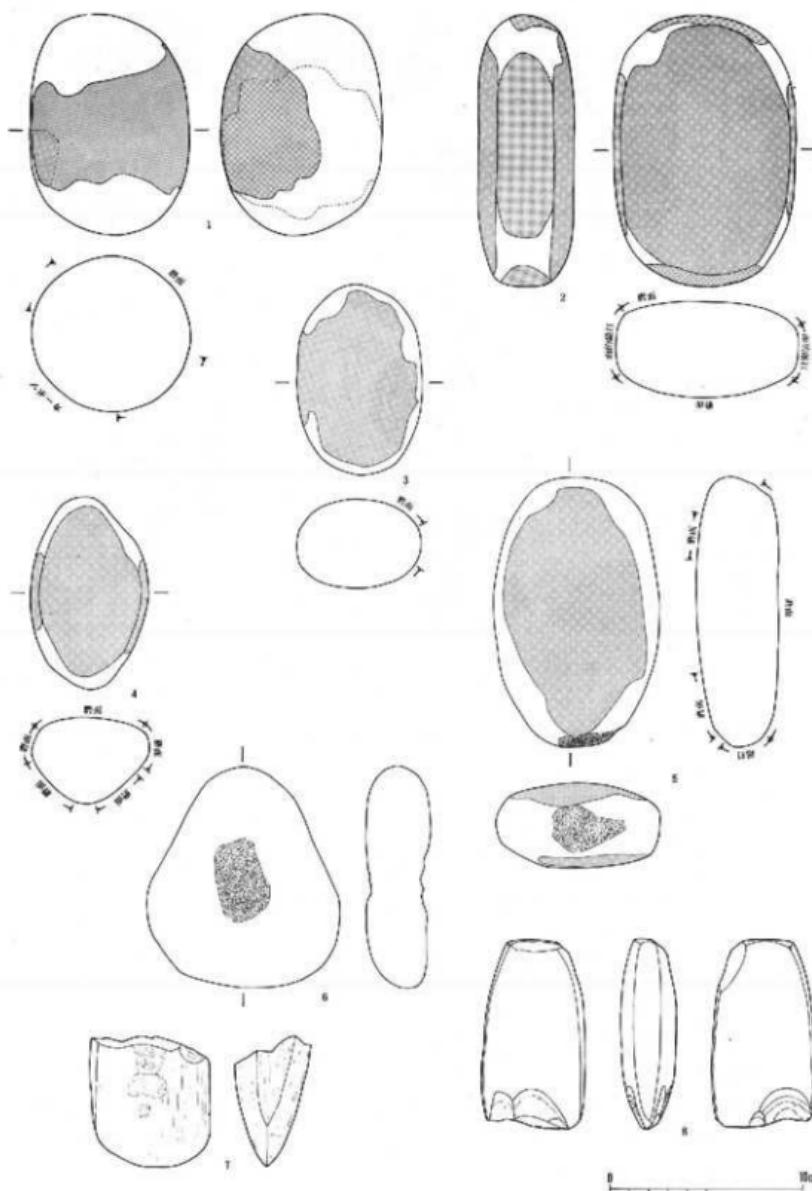
10～13は網代痕を有する土器底部である。

第16図1はミニチュア型土器、2は注口部、3～5は把手である。

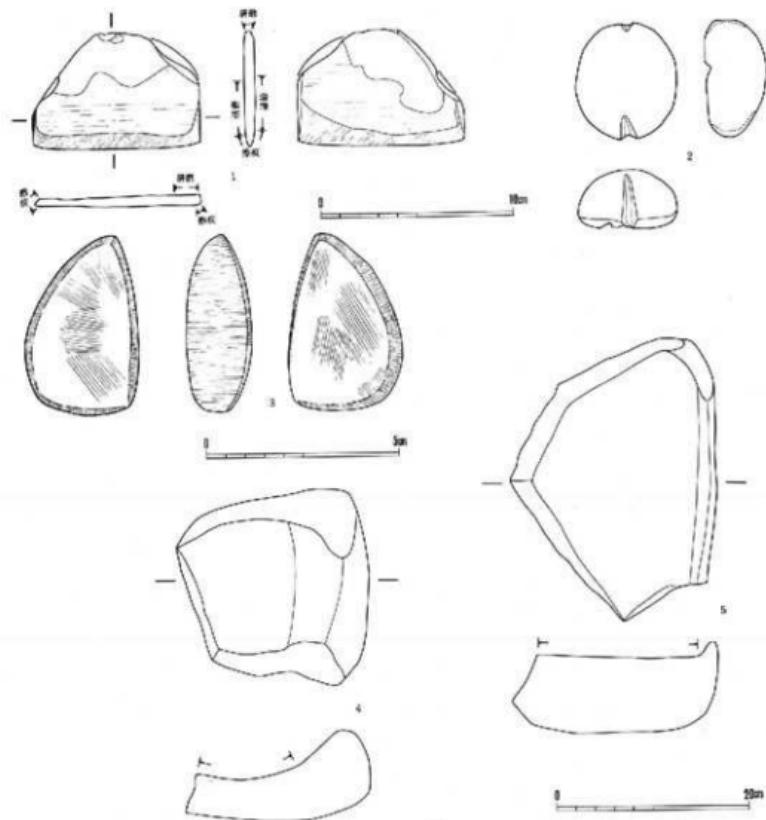
#### 石器（第13～15図）

第13図1～5は磨石である。1の点線部分にはカーボンの付着がみられ、付着状況からみるとカーボン付着後の使用も認められる。2は四側面に面的に広さをもつ敲打痕が認められ、平坦面での作業に用いられたものと思われる。5は蔽石との併用である。石材は1が細粒花崗岩類、2～4が安山岩、5は閃錫岩である。

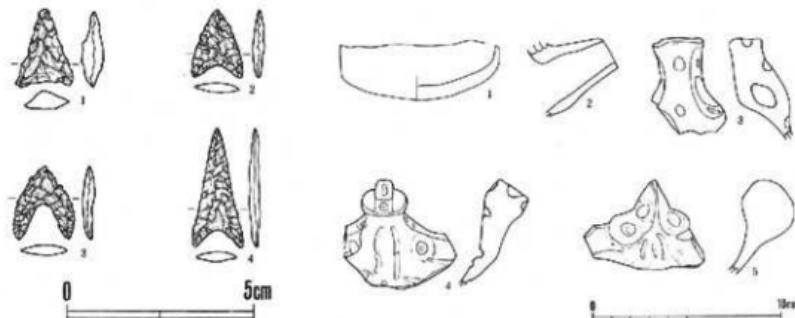
6は安山岩製の凹石である。



第13図 第2号址出土石器1 ( $S = \frac{1}{3}$ )



第14図 第2号址出土石器2 (1.2 S =  $\frac{1}{3}$ 、3. S =  $\frac{2}{3}$ 、4.5 S =  $\frac{1}{6}$ )



第15図 第2号址出土石器3 (S =  $\frac{1}{3}$ )

第16図 第2号址出土土器5  
(1.S =  $\frac{2}{3}$ 、2~5.S =  $\frac{1}{3}$ )

7・8は定角式磨製石斧であるが、7は頭部を欠損する。7が塩基性岩、8が閃綠岩性である。

第14図1は横刃磨製石器である。刃部は直刃両凸刃をなし、刃面には擦痕が顕著である。また、側面にも一部刃部を形成している。石材は細粒砂岩である。

2は長軸方向に切込みを持つ切目石錐である。石材はデイサイトであり、68.8gを測る。

3は第1号址出土石器（第7図1）同様擦痕を有する様で、表裏面は擦痕に方向性を持たないが、側面は一定の方向性を持っている。石材は珪質凝灰岩である。

4・5は石皿の破片であるが、いずれもその多くを欠損している。石材はいずれも安山岩製である。

第15図1～4は石錐である。1は無茎三角錐、2は凹基無茎錐、3は無茎円脚錐でいずれも黒曜石製のものである。4は細身・長身の凹基無茎錐である。チャート製である。

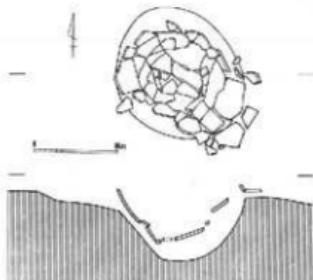
## 第2節 埋設土器

### 第1号埋設土器（第17・18図 図版3-3・5）

調査区南側U-14グリッドを精査中に発見された。胴部上半を欠損した状態で確認された。欠損した胴上半部については、掘り込み確認面に埋設土器の土器片が散乱していたことなどから考えると耕作によって欠損したものと思われ、もともとはほぼ完全な形での埋設土器であったと考えられる。確認面からの掘り込みはほぼ円形を呈し、直径45cm、深さ24cmを測る。土器

内部からは、骨片などの遺物はみられなかった。周辺を精査したが、柱穴、炉址などの住居址に伴う施設は何ら確認できなかったことなどから、単独の埋設土器であると断定した。

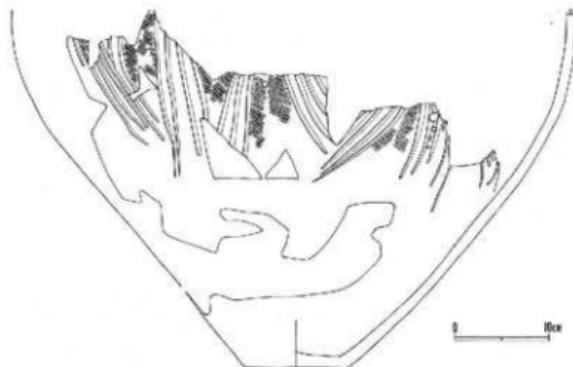
土器は、現存高37.7cm、胴部最大径59.6cmを測る。色調は褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好であるが、内面の磨滅は激しい。施文は、胴中位ほどまでLRを原体とする太い網文を地文に持ち、縦位・斜位ないし「U」字状の太い沈線を配している。また、一部には棒状と思われる施文具によって、刺突がみられる。時期は堀ノ内I式に比定されよう。



第17図 第1号埋設土器平面図 (S=1/20)

### 第2号埋設土器（第19～21図 図版3-4・6）

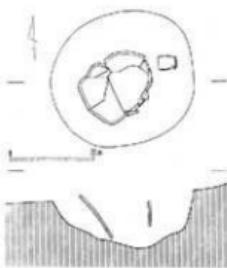
第1号埋設土器の北側、V-14グリッドに位置する。口縁部および底部を欠損した深鉢を正面で用いていた。確認面からの掘り込みは、ほぼ円形を呈し、直径52cm、深さ22cmを測る。土



第18図 第1号埋設土器実測図 ( $S = 1/6$ )

器内部からは骨片などの出土物はみられなかったものの、掘り込みより凝灰岩製の磨製石斧が1点出土した。周辺を精査したが、柱穴・炉址などの住居址に伴う施設は確認できなかつたことなどから、第1号埋設土器同様、単独の埋設土器と考えてよいであろう。

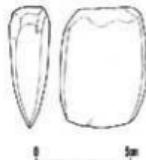
上器は、現存高18cm、胴部最大径23.6cmを測る。色調は暗褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好である。施文は、沈線による縦方向の区画内に「U」字状文を配し、それによって構成された5単位の区画内に11本を1単位とする櫛梳状工具によって綾杉状沈線文が施文されている。時期は曾利IV式に比定されよう。



第19図 第2号埋設土器  
平面図 ( $S = 1/20$ )



第20図 第2号埋設土器  
実測図 ( $S = 1/6$ )



第21図 第2号埋設  
土器出土石器 ( $S = 1/3$ )

### 第3節 ピット群

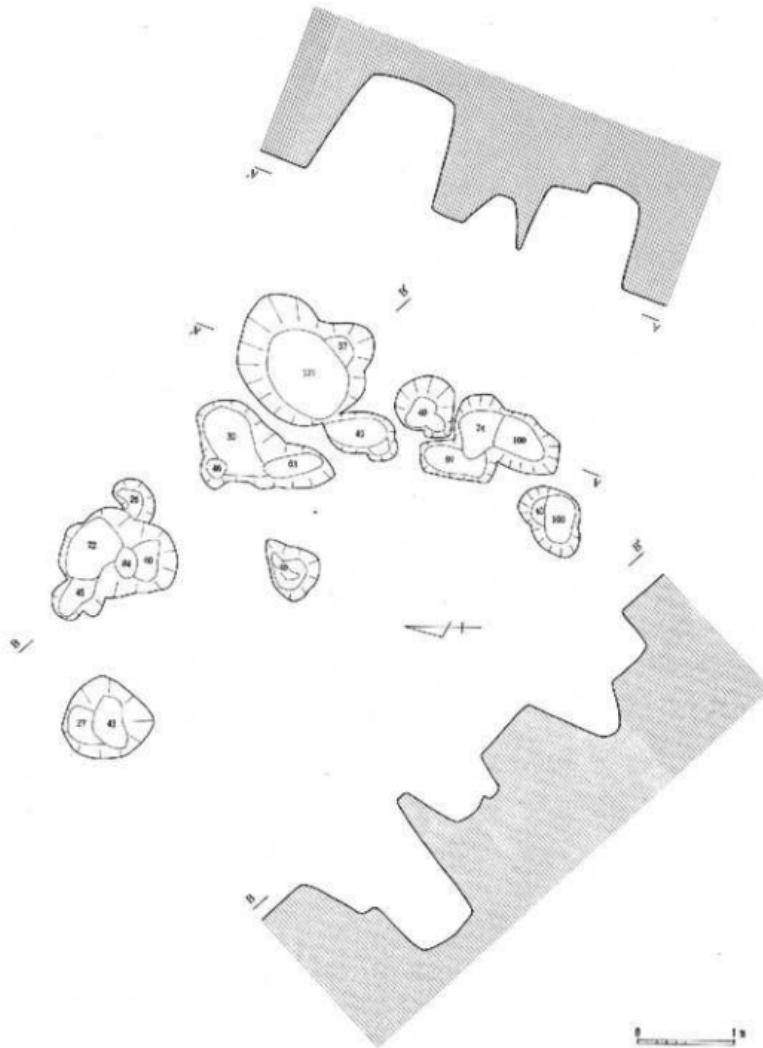
#### ピット群（第22図 図版3-1・2）

U-18グリッド第2号址掘り下げ後に発見された。これらのピット群はかなり重複がみられ形状も円形や梢円形を呈しささまざまである。

出土遺物はほとんどみられず、図示できるものは全くなかった。しかし、第2号址との重複や出土遺物から考え合わせると、縄文時代中期末葉から後期中葉の間に構築されたものと思われる。

れる。

他遺跡の類例からみると、第2号址の柱穴となるものも存在する可能性は指摘できるが、第2号址との関係やその性格については、全く不明なため、ここでは敢えて第2号址とは分離させ、一括してピット群とした。



第22図 ピット群平面図 ( $S = 1/60$ )

## 第Ⅳ章 遺構外出土遺物

### 第1節 土 器 (第23~30図 図版6~9)

本遺跡では、遺構外からも数多くの土器が出土した。これらを時期別に分類し、第1群~第5群土器に大別した。

第1群土器	縄文時代中期初頭
第2群土器	縄文時代中期後葉
第3群土器	縄文時代中期末葉~後期初頭
第4群土器	縄文時代後期前葉
第5群土器	縄文時代後期中葉

各群の土器は、さらに形態、文様等により細別を行った。

#### (1) 第1群土器 (第23図1~5)

縄文時代中期初頭、「五領ヶ台式」と呼ばれる土器を本群とした。本遺跡からの出土はきわめて少量である。本群は、縄文を地文に持つもの（第1類）、沈線のみによるもの（第2類）、内文を持つ浅鉢形土器（第3類）の3つに分類される。

第1類（第23図1~10）1・2は口縁部に2条の沈線を巡らせ、その下に文様を展開させて。4・5も同様な形態をとるものと思われる。7・8は縄文を施文とし、円形刺突文、刻目を有する隆帯をそれぞれ垂下させている。9・10は結節縄文が施されている。

第2類（第23図11~13）11は棒状施文具によって連続押し引き（結節沈線）が施されている。

第3類（第23図14~15）外面は無文で、多竹割の外側による連続押し引きが2~3条巡っている。

#### (2) 第2群土器 (第37図6・7、第23図16~23、第24図1~5・8)

縄文時代中期後葉に属する「曾利式」と呼ばれる土器を本群とした。復原可能な土器が2個体あったものの、ほとんどが小破片で出土量も少ない。本群は8類に分類される。

第1類（第37図7、第23図16~19）地文に列点文を有するものである。

a種（第37図7）現存高36cm、口径46cmを測る。頸部には2条の半截竹割文施文後、結節状連続文を施し、その下に小波状の貼付文が施されている。胴部には粘土紐により小波状および「匂」字状の懸垂文が交互に貼付されており、「匂」字状懸垂文には結節状連続文が施されている。

b種（第23図16~19）地文に列点文を有し、数条の沈線によって文様帶が区画されている。

第2類（第23図20・21）縄文を地文として、頸部に小波状の貼付文、懸垂文が施されるもの。

第3類（第37図6）現存高25cm、口径33.6cmを測る。縄文を地文として、頸部には断面が三角形を呈する粘土紐を一条巡らせ、その粘土紐を垂下させ文様を構成している。

第4類（第23図22・23）地文に条線が施文されるもの。

第5類（第24図2~4）胴部に「八」字状沈線文が施文されたものである。

第6類（24図5・8）地文に縄文を持つII縁部片である。

これらの内、第1～3類は「曾利II式」、第4類は「曾利IV式」、第5類は「曾利V式」にそれぞれ比定されよう。

### （3）第3群土器（24図6・7・9）

縄文時代中期末葉～後期初頭に属する「加曾利E IV式」および「称名寺式」と呼ばれるものを本群とした。小破片が数点認められるのみであった。

第1類（24図6・7）文様区画が縦帶によって行われ、縄文を地文に持つものである。いずれも口縁下3cmほどに落書きが巡り、口縁部と胴部の文様帯とを区切っている。

第2類（24図9）太い沈線によって曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文が満たされているもの。

これらの内、第1類は「加曾利E IV式」、第2類は「称名寺式」にそれぞれ比定されよう。

### （4）第4群土器（24図10～19、25図1～26、26図1～6）

縄文時代後期前葉に属する「堀ノ内式」と呼ばれるものを本群とした。小破片が大半で器形が残るものはみられない。本群は主に文様によって6類に分類される。

第1類（24図1・10～16・18・19、25図1）口縁上部に沈線が巡るもの。

a種（10～13）口縁上部に1条の沈線が巡り、その下に刻目、刺突が施されたもの。

b種（14～16・18・19）口縁上部に1～3条の沈線が巡り、縱位・斜位に沈線が施されたものである。19は斜位の沈線間に絞状沈線が施されている。

c種（25図1）口縁上部に1条の沈線が巡り、その下に刻目を施し有刻降線が垂下するものである。

第2類（25図2～5）胸部に縱位・横位・斜位の沈線が施されたものである。

第3類（25図6～10）胸部に弧状・曲線的な沈線文が施されたものである。8は有刻降線が縱位および横位に施されている。

第4類（25図11～19）縄文を地文とし、その上に主として沈線文が施されるもの。11は口縁部から胴部にかけ有刻降線が垂下し、頸部には2条の有刻降線が巡る。また、その交差部分には「8」字状文が貼付されている。13～15はII縁部およびその付近に数条の沈線が巡り、その間に刺突がなされている。

第5類（25図20～26、26図1～6）磨消縄文によって文様が構成されるものである。

a種（20～24）沈線が弧状・曲線的に施され、その間に磨消縄文が配されるもの。

b種（25・26）口縁上部に「8」字状貼付文をともなう有刻降線が巡り、その直下に磨消縄文が横位に施されるものである。

c種（26図1）口縁上部に有刻降線を持たず、磨消縄文が横位に施されるものである。

d種（2～5）磨消縄文によって幾可学文様が構成されるものである。

e種（6）横位の磨消縄文を持ち、有刻降線が口縁部から頸部に垂下している壺形土器。

第6類（24図1、25図17）粗製の深鉢形上器を一括した。24図1はII縁直下に1条の沈線を巡らし、歯齒状の細沈線が波状に施文されている。25図17は無文土器である。

(5) 第5群土器（第36図1、第37図3、第26図7～21、第27～29図、第30図1～9）

縄文時代後期中葉に属する「加曾利B式」と呼ばれているものを一括して本群とした。小破片が多いものの、一部には器形の窓われる大形の破片もみられた。本遺跡では本群を主体とする。本群は器形および文様によって19類に分類される。

第1類（第36図2、第26図7～9）胴上半に「横帯文」が施される深鉢形土器である。

a種（第36図2）口径18.6cmを測る。横帯文と区切り縦線文が施文されている。口唇部および口縁部下の屈曲部分には細い刻文が斜位に連続して施され、その下に横帯文を配する。また、内面には稜を有する。

b種（7）横帯文を有し、沈線等の内文を施すものである。

c種（8・9）胴上半に横帯文のみを施文するものである。

第2類（第26図10～16）胴上半に縦方向の対弧文を有する深鉢形土器である。

a種（10・11）縦單対弧文と横帯文との組合せによって施文されたものである。

b種（12・15）縦連対弧文と横帯文との組合せによって施文されたものである。

c種（13・14・16）弧線帶の磨消縫文帶と対弧文との組合せによるものである。

第3類（第26図17～21、第27図1・2）胸部に斜線文・羽状沈線文が施された深鉢形土器である。

a種（17・18）平縁で斜線文・羽状沈線文が施されたものである。

b種（19～21、第27図1・2）口唇部に刻目を持ち、内面に1条の沈線を施すもの。

第4類（第27図3～7）体部が「く」の字状に内窓する所謂「ソロバン玉」状を呈する深鉢形土器である。

a種（3・4）屈曲部に縫文を施こし、肩部文様に磨消弧線文が用いられるものである。

いずれも弧線連結部には円形刺突文と縦位区画文がみられる。

b種（5）屈曲部に縫文を施こし、肩部文様が弧線帶の磨消縫文帶となるものである。胴部には格子目状沈線文がみられる。

c種（6）屈曲部の2条の沈線間に刻文が施されているものである。肩部には入縫文が施されているものと思われる。

d種（7）屈曲部の2条の沈線間が無文となるものである。

第5類（第27図8・9）胸部に格子目状沈線文が施された深鉢形土器である。いずれも口唇部に大きな刻目を有する。

第6類（第27図10～14）胸部に縫線文を貼付する深鉢形土器である。

a種（10・14）縫線文が2条巡るものである。

b種（11・12）縫線文が1条巡るものである。

第7類（第28図1）連続横「S」字状文が施された深鉢形土器である。

第8類（第28図2）胸部に横線文が施された深鉢形土器である。

第9類（第28図3）数条の横線間に刻目を有する深鉢形土器である。

第10類（第29図4・5・6）胸部が無文となり、口唇部に刻目を有する粗製深鉢形土器である。

第11類（第28図7～19）胸部に横帯文を施す鉢形土器である。

- a種（7）口縁に刻目を有するものである。
- b種（8～12）口縁部下から横帯文を施すものである。
- c種（13～15）横帯文と縦対弧文の組合せによって施文されたものである。
- d種（16）横帯文に区切り縦線文が施されたものである。
- e種（17）横帯文内に縦方向の沈線が充填されるものである。
- f種（18）横帯文を形成する沈線がお糸杓子文を持つものである。
- g種（19）体部が「く」の字状に屈曲し、横帯文上に入組文が施文されるものである。

第12類（第28図20・21、第29図1～11）口縁部に磨消連弧文を持つ鉢形土器である。

- a種（第28図20・21、第29図9）口縁部に磨消連弧文を持ち、口縁部と体部の境に2本の横線に画されて繩文帯が巡っている。20・21は体部にも磨消連弧文が施されている。
- b種（第29図1～3）口縁部と体部の境に2本の横線のみが巡るものである。
- c種（4）体部に斜線文が施されるものである。
- d種（5～7）口縁部と体部の境に2本の横線に画されて刻目が巡っているものである。
- e種（8）口縁部に小突起が貼付されるものである。
- f種（10・11）体部に上向きの弧線文が施文されるものである。

第13類（第29図12～17）口唇部に帯状繩文を持つ鉢形土器である。

- a種（12・13）帯状繩文と垂線抱き対弧文が施文されるものである。
- b種（16・17）口唇部と体部の境を2本の横線によって両された繩文帯が巡るものである。
- c種（14・15）口縁部と体部の境を2本の横線によって画するものである。

第14類（第29図18～20）列点文を施した鉢形土器である。

第15類（21・22）口縁部を2本の横線で曲げられて刻目が巡る鉢形土器である。

第16類（23～25）外面を無文とし、内文を持つ浅鉢形土器である。

第17類（第30図1）内外面に2本の横線によって画され刻目が巡る浅鉢形土器である。

第18類（2）頸部に横帯文、その下部に弧線帶の磨消繩文帯が巡る壺形土器である。

第19類（3～10）注口土器を一括した。

これらの内、第1・2・7～9・11・15～19類は「加曾利B I式」に第3～6・10・12～14類は「加曾利B II式」にそれぞれ比定されるものと思われる。

## 第2節 土製品（第31図）

本遺跡からは上製品類はあまり出土しなかったが、ここでは注口部も含め土製品類とした。第31図1～4は注口土器注口部である。5は土製円盤である。土器底部を利用したものであり、胎土には金環母を多量に含む。6はミニチュア形土器である。内面には輪積み痕を明瞭に残している。7は中空土偶胴部破片と思われる。胴中心部には1mmほどの穿孔がみられる。その穿孔部を中心として同心円状に沈線が4条施され、外郭線は横方向に延びている。その間に始点に刺突を持つ沈線を配し、繩文を施文している。

### 第3節 土器底部 (第32図)

本遺跡から出土した土器底部は小破片も含め、総数 222 個を数える。このうち 6 個は本葉痕を有し、144 個（全体の 64.9 %）に網代の痕跡が認められた。しかしながら、このうち 37 個は小破片や磨滅が著るしかったり、網代痕を残すものの、ヘラ状工具によって底部整形を行ったりしているため網代の判読が不可能であった。網代の種類が判読できるのは、網代痕を有する全体の 63.6 % にあたる 107 個であった。

それらを分類すると、網代の編み方には次の 6 種類が認められる。

- |     |                                 |                |          |
|-----|---------------------------------|----------------|----------|
| 1 類 | 「2 本越え、1 本潜り、1 本送り」             | 100 個 (93.5 %) | (1 ~ 13) |
| 2 類 | 2 本を 1 単位として「2 本越え、1 本潜り、1 本送り」 | 1 個 (0.9 %)    | (18)     |
| 3 類 | 「1 本越え、1 本潜り、1 本送り」の所謂平織        | 2 個 (1.87 %)   | (14)     |
| 4 類 | 「3 本越え、2 本潜り、1 本送り」             | 2 個 (1.87 %)   | (15)     |
| 5 類 | 「3 本越え、3 本潜り、1 本送り」             | 1 個 (0.9 %)    | (17)     |

使用されている原体の幅は 1 mm ~ 7 mm の間である。経緯の幅は大部分が同じものであるが、一部には幅の異なるものを用いているものもみられる。原体の幅については粗製上器よりも精製上器の方が幅の狭い原体を用いているようである。また底部の凹部分にまで網代がみられるものもあり、原体の材質に柔かいものを用いているものもみられる。

以上のように、本遺跡では 1 類が 9 割強を占める。山梨県では網代底についての報告例は少ないが、上平出遺跡でも 1 類が大部分を占める。東日本では 1 類が基本とされているが、本遺跡も含め、山梨県においても、その例に漏れないようである。

### 第4節 石 器 (第33~35図)

磨石 (第33図 1・4・7) 4・7 は蔽石併用である。4 は圓上点線部分にカーボンの付着がみられる。いずれも安山岩製である。

凹石 (2・3・5・6) 2 は磨石、5・6 は蔽石の併用。いずれも安山岩製である。

蔽石 (8~10) 9 は敲打面の剥離状態からみてかなり強打されたものと思われる。8・9 は安山岩製、10 は塩基性岩製である。

磨製石斧 (第33図11、第34図1・2) 定角式磨製石斧であると思われるが、11・1 は刃部を欠損する。11 は凝灰岩製、1 は安山岩製、2 はチャート製である。

打製石斧 (3~5) 3 は調査加工後に一部を研磨している。5 は両側面には擦痕が顕著である。再端部にはかるくたたきつぶしたような潰れがみられる。また、一部には鋭いナイフ状の刃でキズをつけたような深い線状痕がみられる。3 は砂岩、4 は粘板岩、5 は千枚岩製である。

石錘 (6~8) 6 は短軸に切り目を持つ切り目石錘、51.1 g を測る。7 は中粒砂岩製の碌石錘、92.8 g を測る。8 は安山岩製碌石錘、114.9 g を測る。

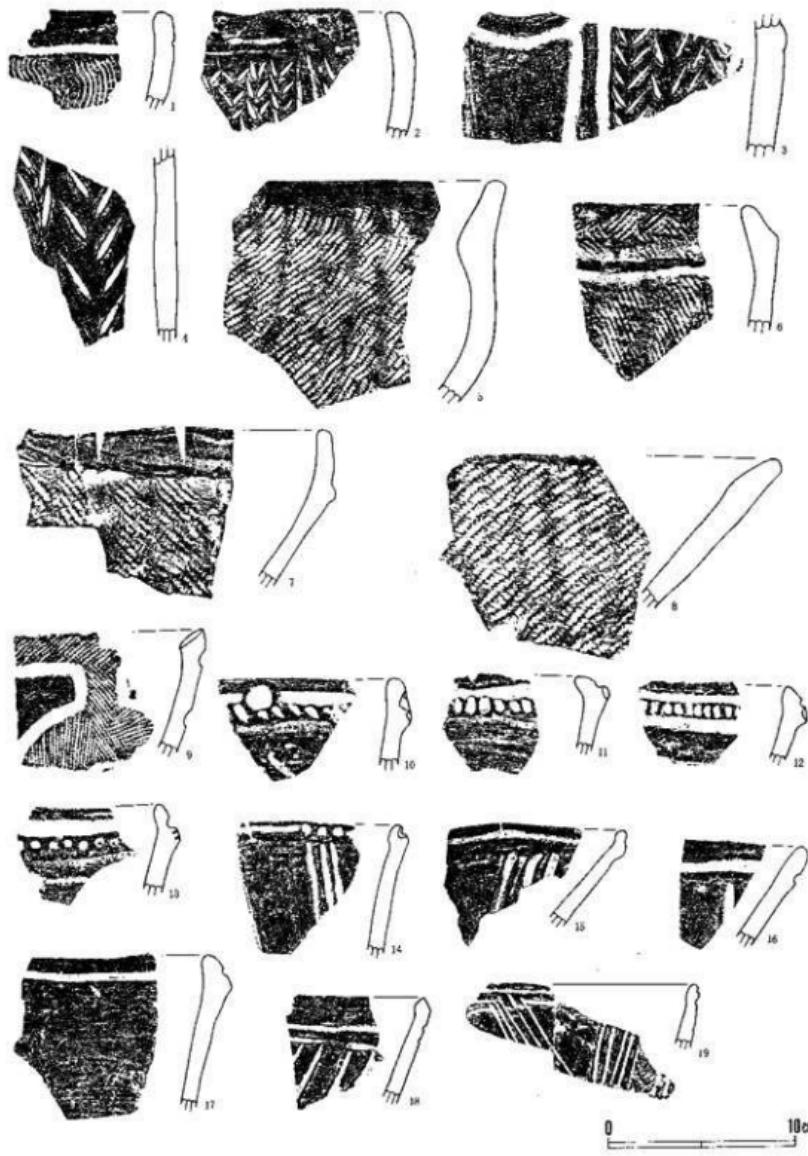
石皿 (9) 緑が立ち上がり、長方形を呈する。欠損するものの、脚は 4 個を有したと思われる。安山岩製である。

石棒 (10・11) 10 は小形で中央部が若干内凹する。10 は片岩、11 は安山岩製である。

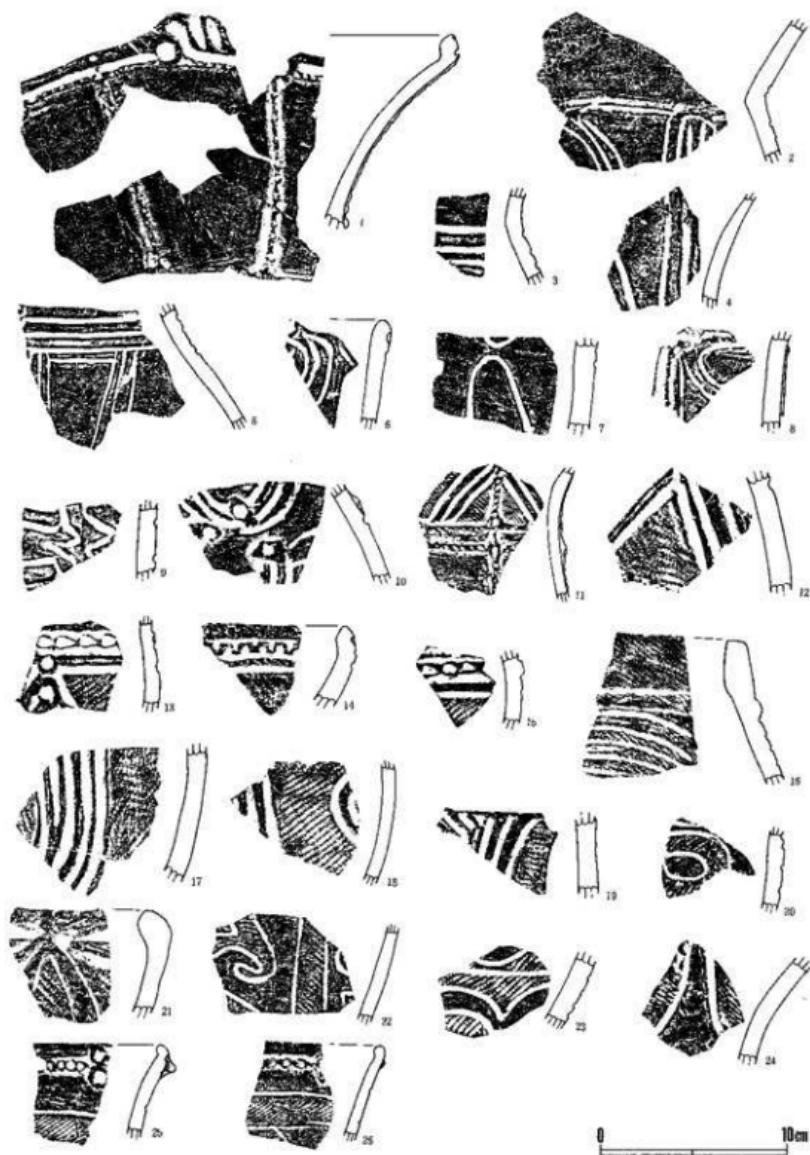
石鏃 (第35図 1~6) いずれも黒曜石製凹基無茎鏃である。1~3 は局部磨製石鏃である。



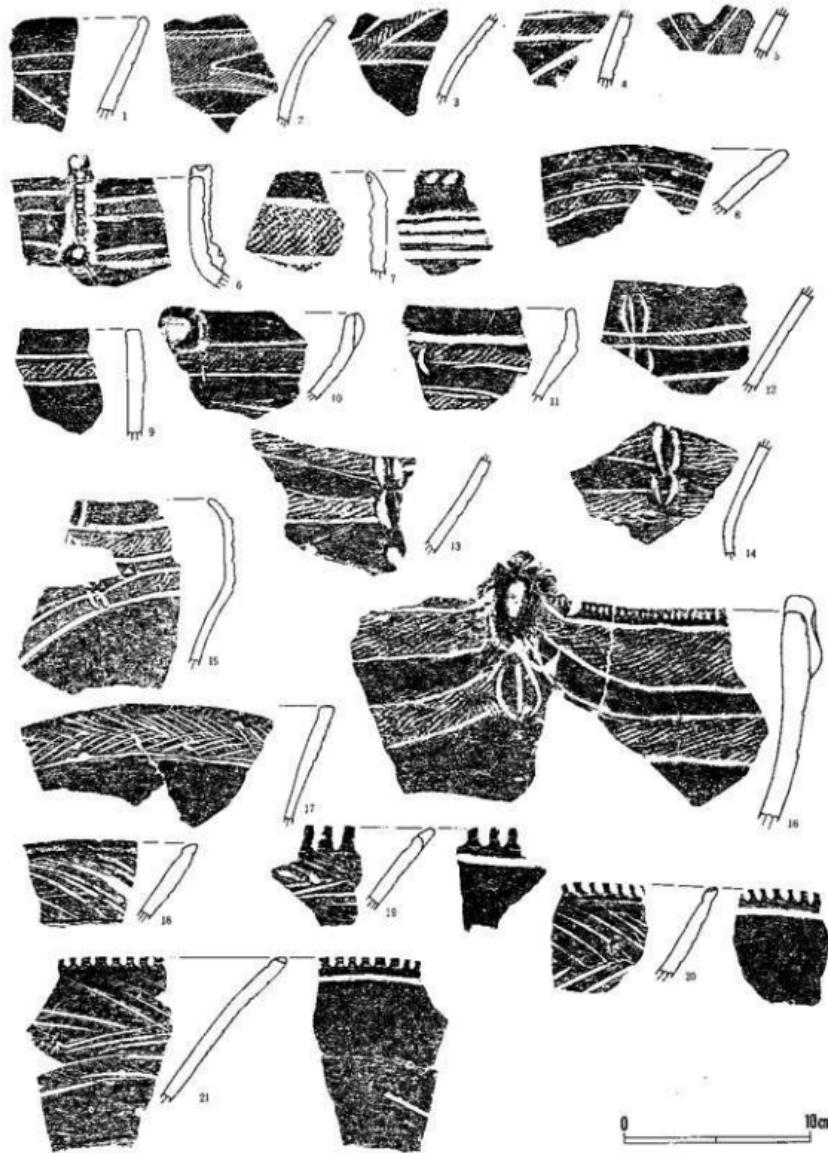
第23図 遺構外出土土器 I ( $S = 1/3$ )



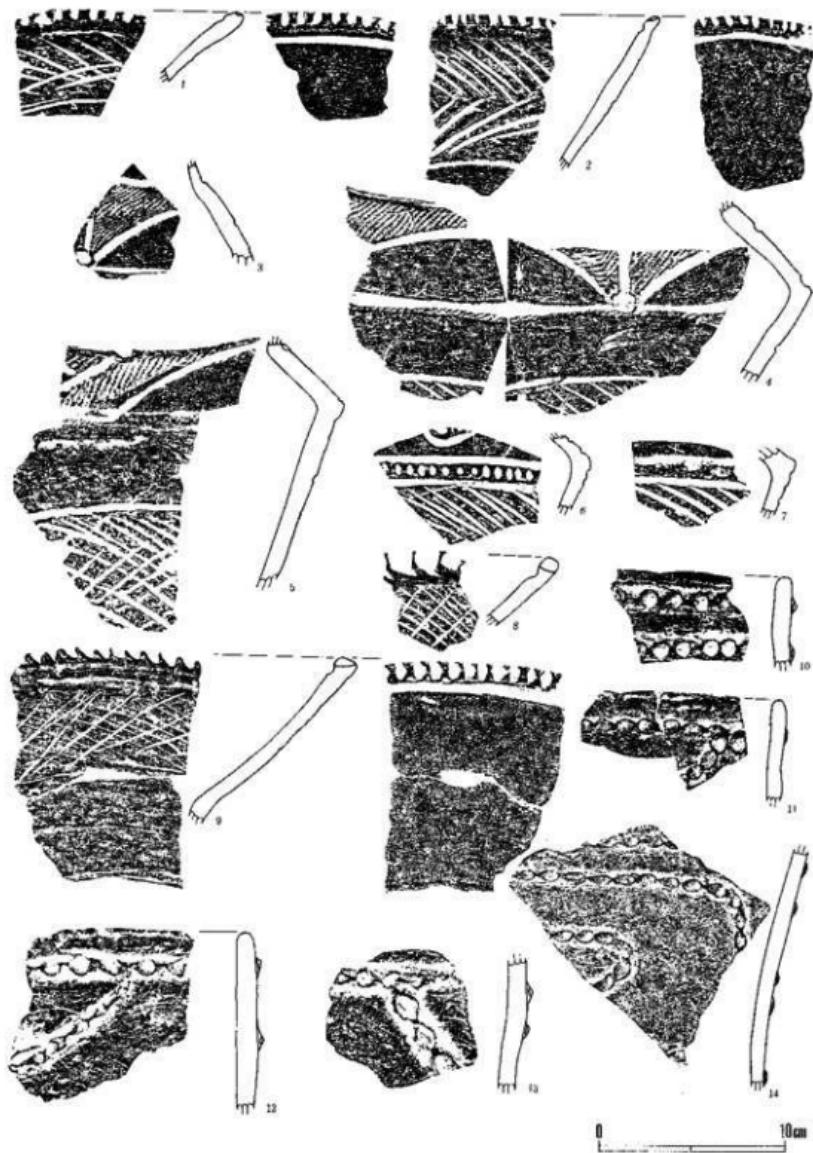
第24図 遺構外出土器 2 ( $S = 1/3$ )



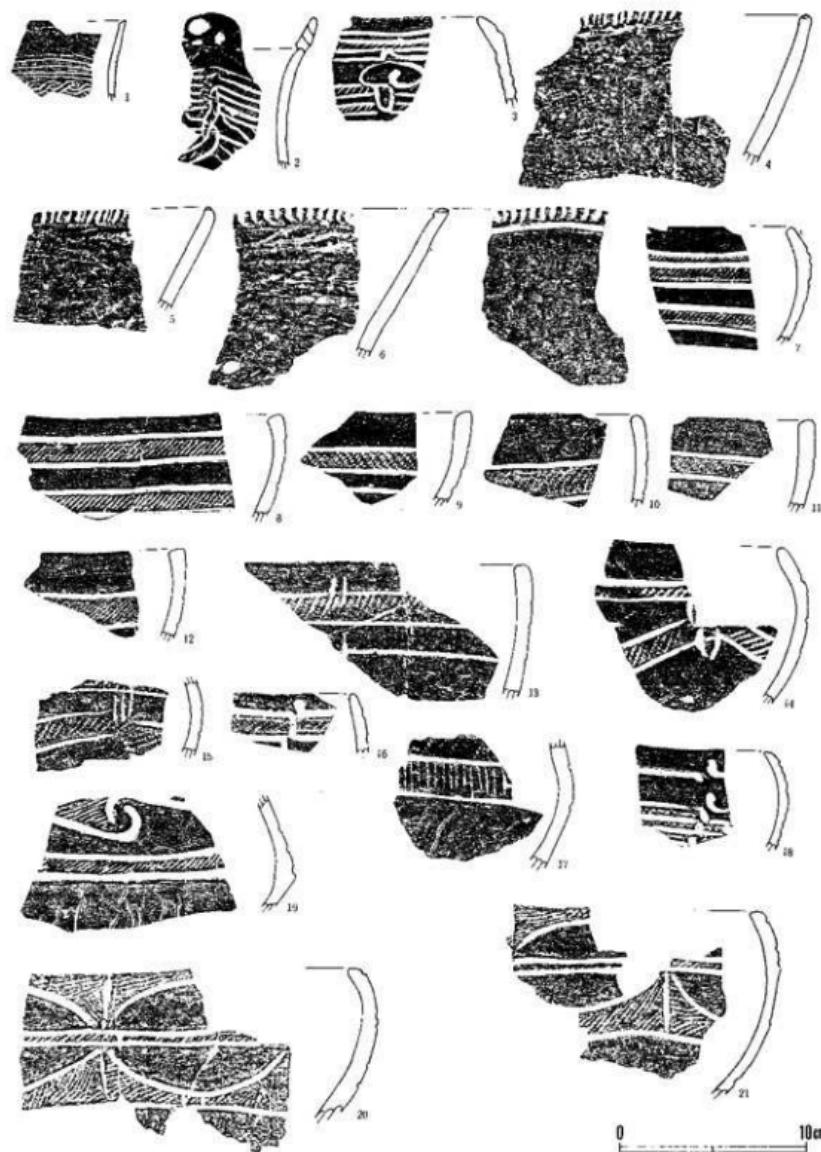
第25図 遺構外出土土器3 ( $S = \frac{1}{3}$ )



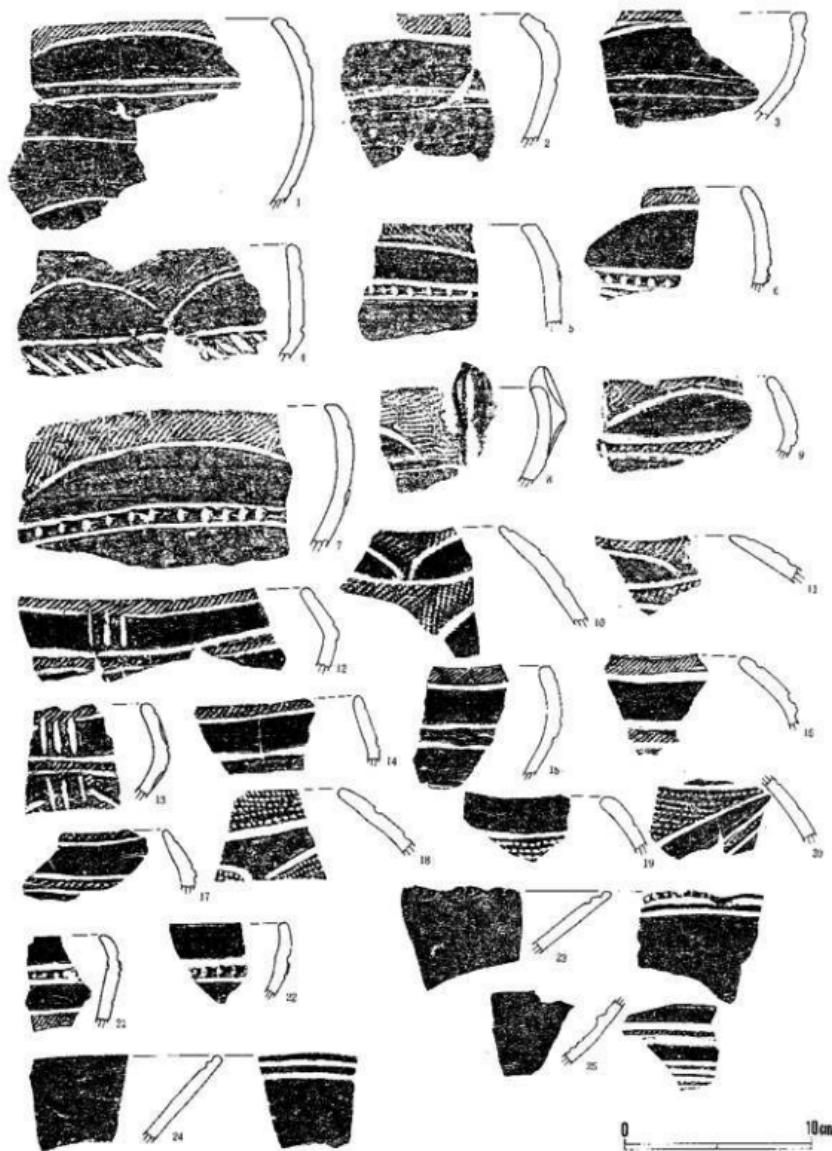
第26図 遺構外出土土器 4 ( $S = \frac{1}{3}$ )



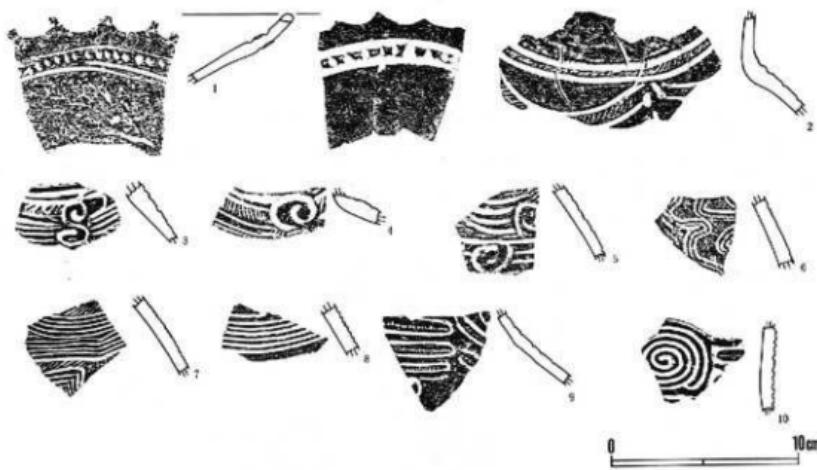
第27圖 遺構外出土土器 5 (S ~ 1/3)



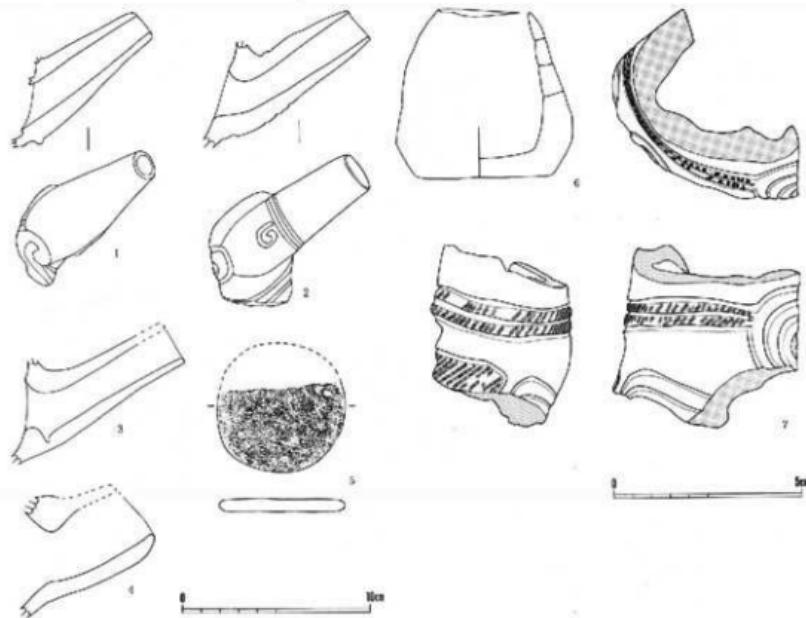
第28図 遺構外出土土器 6 (S = 1/3)



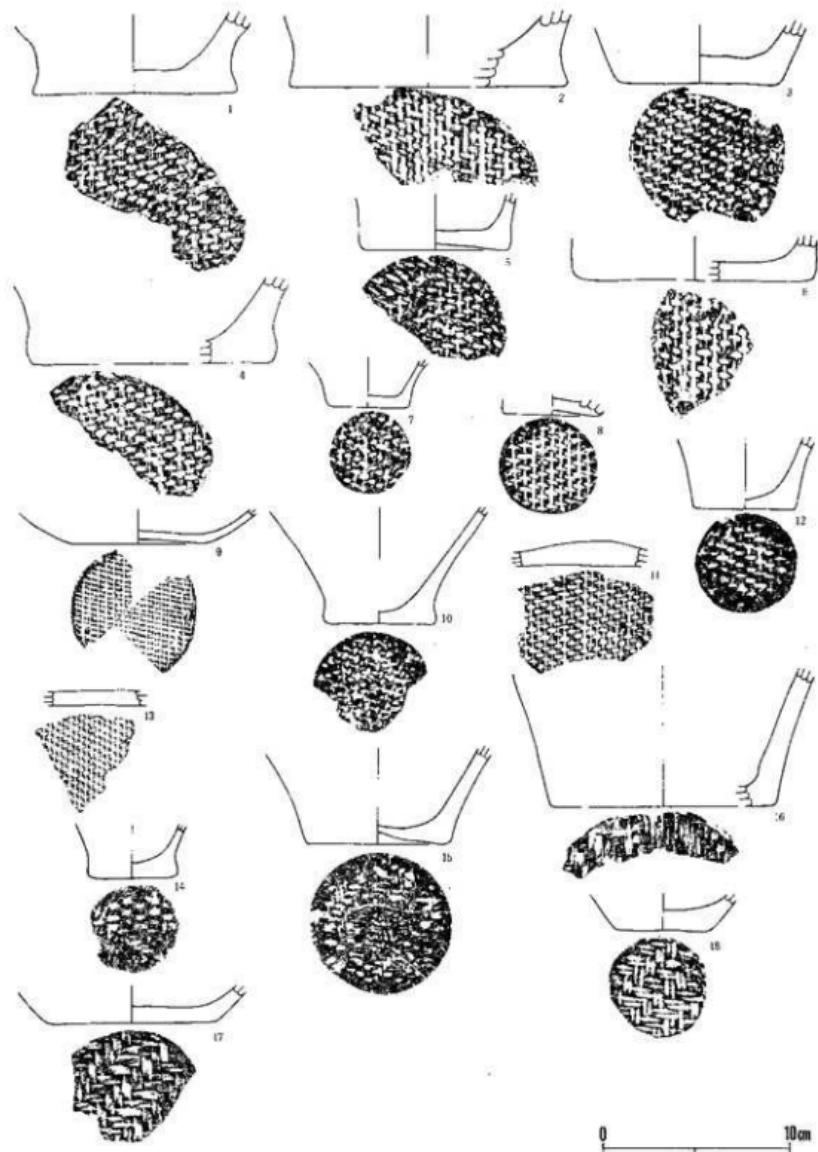
第29図 遺構外出土土器7 (S-1/3)



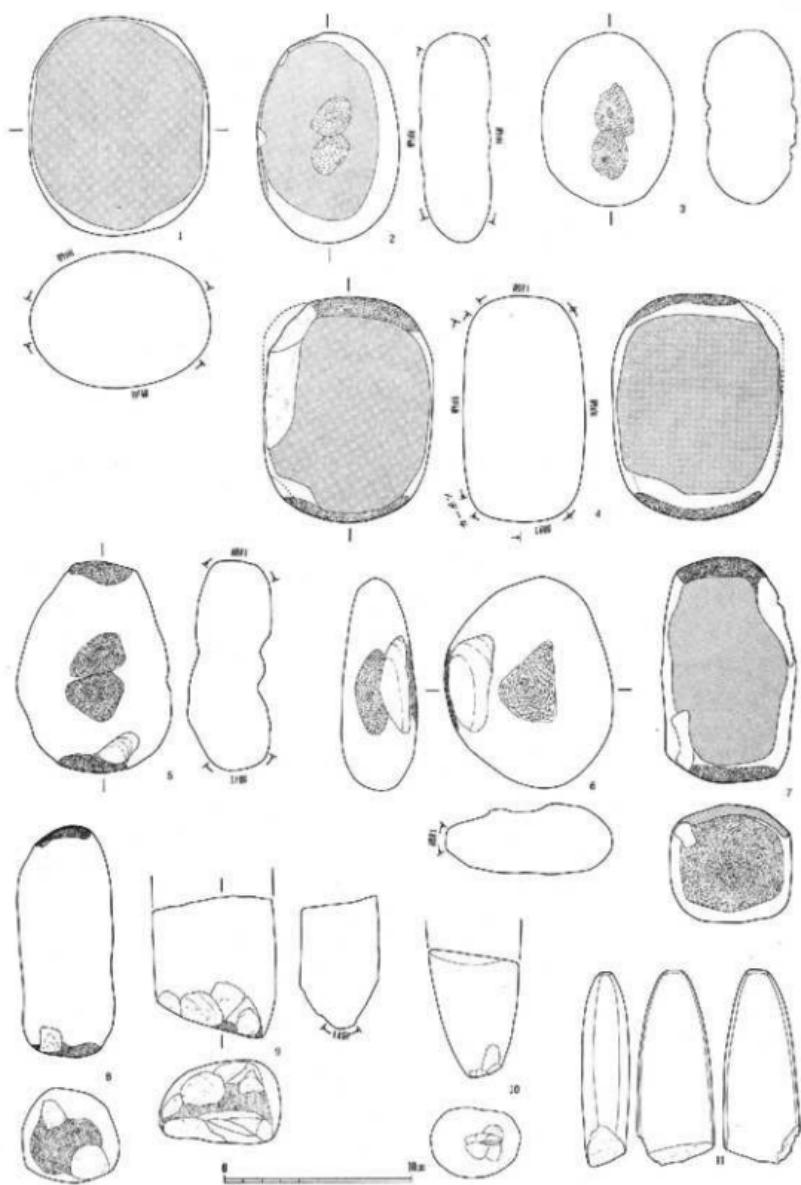
第30図 遺構外出土土器 8 (S = 1/3)



第31図 遺構外出土土製品 (1 ~ 5 S = 1/3、6・7 S = 2/3)



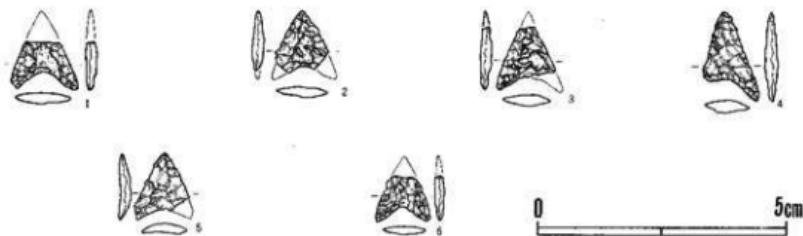
第32図 遺構外出土土器底部 ( $S = \frac{1}{3}$ )



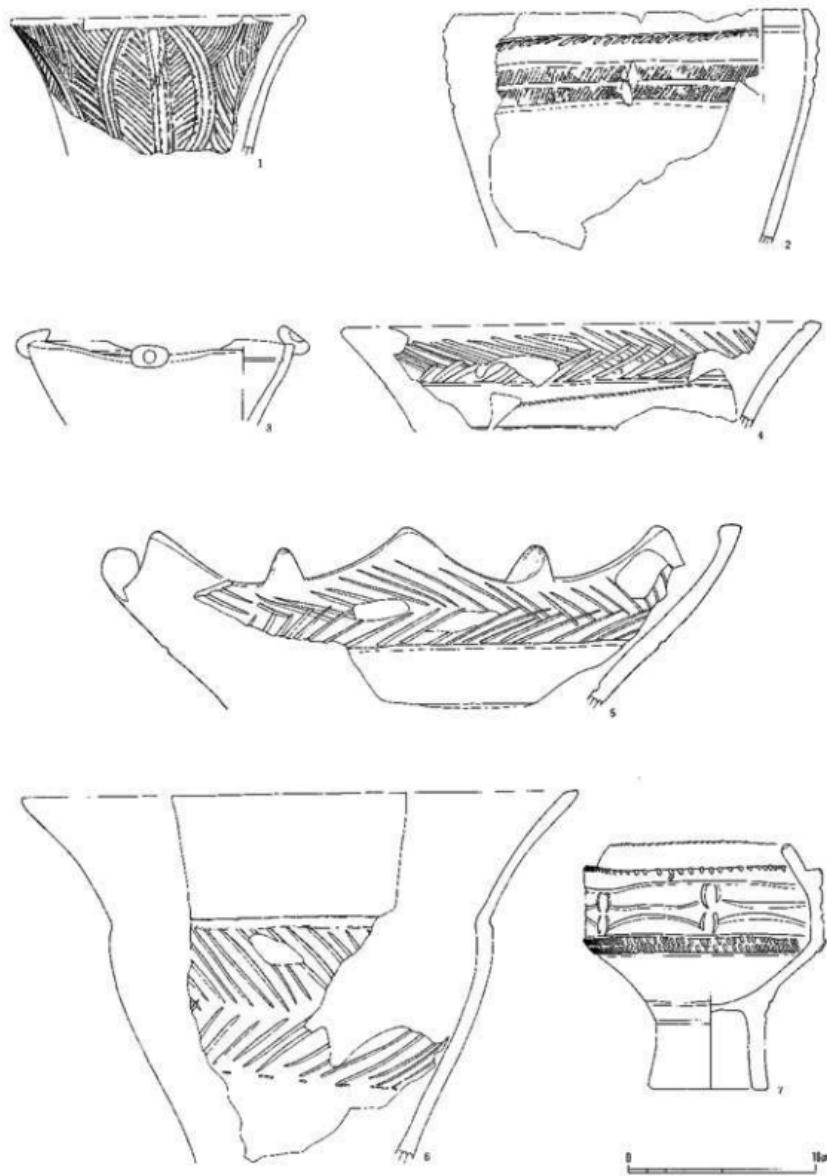
第33図 遺構外出土石器 1 ( $S = \frac{1}{3}$ )



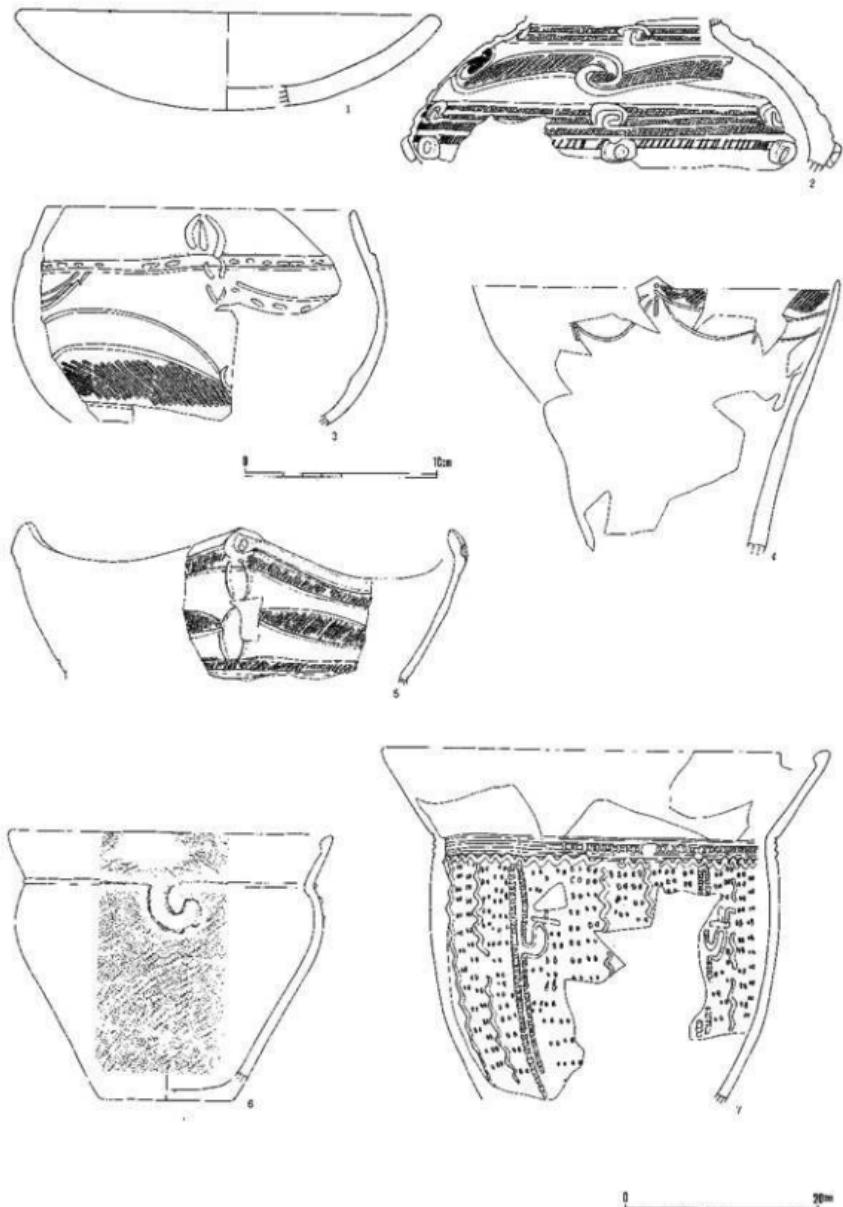
第34図 遺構擲出土石器 2 ( $S = \frac{1}{3}$ 、ただし 9・11は  $S = \frac{1}{6}$ )



第35図 遺構外出土石器 3 ( $S = \frac{2}{3}$ )



第36図 土器実測図1 ( $S = \frac{1}{3}$ )



第37図 土器実測図2 (1~3 S=1/3、4~7 S=1/6)

## 第V章 まとめ

今回の調査では、縄文時代中期初頭から後期中葉にかけての遺構・遺物が検出された。前述したように、本遺跡の南には、村内最大規模と思われる縄文時代中期から後期にかけての平林・平林南遺跡がある。しかし、現在は学校・住宅等によってかなりの破壊が進んでおり遺跡の範囲も明らかではないが、本遺跡も南側へ延びることが想定されることから、同一の遺跡として考えられるかもしれない。

以下、検出された遺構・遺物について一瞥したい。

### 遺構について

第2号址はゆるやかではあるが立ち上がりを持ち、その外側に礫を巡らすという特異な遺構である。同様に石を巡らす遺構としては環礫方形配石遺構があるが、東京・神奈川に限られるようであり、炉を有するものの、堅穴は伴わない。大平大塚遺跡では石列が堅穴の外を巡り、張出部を有する配石圓錐堅穴家屋址とされたものがある。<sup>(1)</sup>また、久保田遺跡では張り出し部を有し、主体部の周囲を礫で囲んでいる柄鏡形礫堤住居址が検出された。<sup>(2)</sup>山梨県においても金生遺跡や石堂B遺跡等においても検出されているようである。<sup>(3)</sup>

第2号址のような形態を有する遺構が、集落内において（単独で存在した可能性もあるが）一般的な堅穴住居址とは区別され、祭祀場などの特殊な性格を持つものであるのか、堅穴住居址と同様に、一住居形態にすぎないのかについては、山梨県において縄文時代後期以降の堅穴住居址の検出例がほとんど無いことから比較、検討は現段階ではできない。また、敷石住居址との関係についても考える必要があるだろうが、今後の類例の増加を待って検討したい。

### 遺物について

#### 土器

本遺跡からは縄文時代中期初頭から後期中葉までの土器が確認された。そのうち5群土器は19類に分類された。それらは加曾利BⅠ・Ⅱ式に比定され、BⅢ式については比定されるものがみられなかった。中谷遺跡においては、本遺跡5群3・13類類似のものをBⅢ式としている。<sup>(4)</sup>しかし、それらはBⅡ式期にもみられ、他の文様構成を持つ土器にBⅢ式の特徴を持つものがみられないことなどから敢えてBⅡ式としたが、これが時間差によるものなのか、地域差によるものなのか不明なため、BⅢ式の範疇として把えることができるものも含まれている可能性は残される。関東地方と類似した様相を持つBⅡ式以前においては関東編年に依頼できるものの、地域性が見い出されるBⅢ式以降においては、小地域の中で把える必要性があろう。しかし、現在山梨県においては金生遺跡の調査以来、北巨摩地域の墳場整備事業に伴う発掘調査で石堂B遺跡などこの時期の遺構・遺物がみられるが、現在整理作業中で報告がなされておらず、その詳細については明らかにされていない。これらの報告がなされるとともに、再検討したい。

第1号址出土土器10・11は前述したように中津式の特徴を備えている。また、第2号址出土の注口上器（第30図9）は半円形の隆蒂は持たないものの、三重県馬場遺跡出土のII群土器中

<sup>(5)</sup>

に同様な文様構成を持つ注口土器がみられる。馬場II式は元住吉II式と併行関係にあり、本址の構築時期とは差があり本址に伴うものではないようではあるが、これらの土器により、東海・近畿地方との交流があったことが裏付けられよう。

#### 石器

第1・2号址よりそれぞれ1点づつではあるが同様な形態を持つ擦痕を有する硃が出土している。同様な形態を有するものは三光遺跡からも出土しているが<sup>(9)</sup>玉として報告されている。玉としての可能性もあるが、いずれも穿孔の形跡はみられず、側面に一定方向の擦痕を有することなどから、土器など何かを研磨するために用いられたことも考えられる。

また第35図1～3は局部磨製石鎌であるが、これは早期を中心としてみられるようであるが、本遺跡では早期の土器は全くみられなかったことから、局部磨製石鎌が中期以降も用いられた可能性も残される。

#### 骨片

第2号址炉址および敷石の下より出土した骨片については金子浩昌先生にその鑑定をお願いしたが、それによると歯骨以外にカエル・ヘビなどの骨片もみられるようである。縄文時代後晩期の遺跡から焼けた骨片が出土することについてはすでに先学により、その意味について多くの論考がなされている。<sup>(10)</sup>それによると単に食料として用いられたのではなく、祭祀として骨が焼かれたことが指摘されている。それらの骨は、木遺跡からも出土しているシカやイノシシが多いようであるが、それと同時にカエル・ヘビなどの骨片がみられたことは、それらが、シカやイノシシと同じ意味を持って焼かれたと考えられる。また、本例のように敷石の下より出土したことから考えれば、ただ単に焼かれたものではなく「埋納」といった意図的な動作がみられる。このことは焼骨が何んらかの意味を持っていた証左となりうるであろう。

(注) 1 鈴木保志「環礁方形配石遺跡の研究」『考古学雑誌』62-1 1976

2 小野亮一「修善寺人塚」修善寺町教育委員会 1982

3 花岡弘「久保田」小瀬山教育委員会 1984

4 新津健他「山梨県立生遺跡」『日本考古学年報』33 日本考古学協会 1980

5 1985年より高根町教育委員会が調査中

6 奈良泰史「中谷・宮脇遺跡」都留山教育委員会 1981

7 百瀬長秀「羽伏山線文を持った土器の系統と展開」『長野県考古学会誌』49 1984

8 紅村弘他「東海先史文化の諸段階」資料編 II 1979

9 小野正文他「三光遺跡」御坂町の埋蔵文化財 御坂町教育委員会 1979

10 尚山純「配石遺跡に伴出する焼けた骨類の有する意義上・下」『史学』47-4 48-1 1976.77

金子浩昌「動物遺存体」『なすな原遺跡-461地区調査-』なすな原遺跡調査会 1984

新津健「縄文時代後晩期における焼けた歯骨について」『日本史の黎明』 1985

# 清水端遺跡検出の動物骨

金子 浩昌

清水端遺跡からは縄文後期の堀之内期及び加賀利B期の配石遺構が検出されたが、その周辺から細片化した動物骨が採集されている。それらについて標本が筆者のもとにもたらされたので、その概要を報告する。

## 1 標本の状態

標本はいづれも強く火を受けているもので灰白色に変色し、また細片化していた。大形の標本でも1cm四方の大きさがあれば良好な方で、大部分はそれよりもさらに小さく、また粉状になっているものも多かった。しかし、一部土塊とともに検出されてきたものによると、7~8cm位の長さを保っていた焼骨であり、原形をある程度知り得るものであった（ただし、筆者のものにきたときにはさらにこわれていたのであるが）。これによると、上中に埋存している間は、今少し大きな骨片としてあったことも考えられ、出来るだけ大きな破片で採集されることが望ましいことを痛感した。いざれにしても、かなりこの配石遺構周辺には焼けた骨が散在していたことが推測される。

## 2 骨の内容

焼骨は3層に分けられた層序に基づいて採集されたが、その他に特に「石下」とされるものがあった。「石下」とされたものはやや骨の大きなものであったが、その種類を判定するに充分なものは鹿角を除いてなく、単に獸骨片としておく外はない。ただし、それらの骨は特に厚みのあるものではなく、多分シカもしくはイノシシの骨片と思われる。鹿角片としたものもありあったので、シカの角の幹部破片があったのであろう。

## 3 その他の焼骨

### 1 層出土の焼骨

獸骨の細片が大部分であった。その中に細い練状の骨片が数点あり、魚骨かとも思われたが小片のために確認するまでに至らなかった。さらにヘビの椎体を検出した。完全なものではないが、椎体と椎頭部分がのこる。アオダイシ<sub>g</sub>ウ位の大きさになるものがある。

さらに鳥類の骨片と思われるものがある。これは全くの破片で骨の部位を確認することもできない。

その他は多分イノシシ・シカの骨片であろう。

### 2 層出土の焼骨

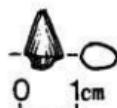
鳥骨片1点を検出。その他は獸骨片であるが骨質はうすい。シカ・イノシシであれば若い個体のものではないかと思われる。骨片中に岩様骨（鼓室部の骨）の細片化したもの数点を検出。これも小さい。頭蓋の破片、頭蓋の破片があるので、頭蓋があったのかも知れない。幼獣の頭蓋とすればイノシシであろう。イノシシであれば0.5才から1才位の骨の出土することは稀ではなく、山梨県金生遺跡からは、この年令の焼骨が多量に出土している。

### 3 層出土の焼骨

ヒキガエルの左桡・尺骨近位関節部が出土している。その他にカエルと思われる骨は検出できない。あるいは細片化しているのかも知れない。

大部分は獸骨であるが、これらもまた骨質のやや薄手のものである。

加工痕をもつ骨



1層の焼骨片にまじり、人為的な加工骨片が1点出土している。素材は鹿角であろう。三角錐状の頭部をもち、細い柄（茎）のような形の部分がある。その先端は折れている。この三角錐の高さ×長径は $9.0 \times 6.2$  mm、柄の径は $3.4 \times 1.3$  mmである。鹿角製の鏃とみることもできるが、通常の

加工鹿角実測図  
(S = 1/1) 製品に比べて小さく、茎が細い。

清水端遺跡出土の焼骨の特徴

以上本遺跡から検出された動物骨について記したが、査定された動物骨は次のようなものであった。

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
I 硬骨魚綱	Class Osteichthyes
種不明	Sp. indet.
II 両生綱	Class Amphibia
無尾目	Order Anura
ヒキガエル科	Family Bufonidae
ヒキガエル	<i>Bufo bufo formosus</i>
III 蜥虫綱	Class Reptilia
有鱗目	Order Ophidia
ナメラ科	Family Colubridae
属・種不明	Gen. et sp. indet.
IV 鳥 綱	Class Aves
種不明	Sp. indet.
V 哺乳綱	Class Mammalia
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ	<i>Sus scrofa leucomystax</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>

このうちカエル類、ヘビ類は僅かな骨の出土であったが、このような焼骨中に発見したことは珍しい。こうした動物がイノシシやシカなどと同じように扱われていた証左なのであろう。從来この種の骨が貝塚その他で検出されることは決して珍しいことではなかった。しかし、大型獸類のように、それを捕食していたという証左が欠けていた。ヘビやカエルが土中にあって自然死し、それが混入する可能性があったからである。しかし、これが焼けているとなれば、

人為的な取り扱いがなければ混入することが無いからである。筆者はこれまでにヘビに関しては二例程の例をみて来たが、今回さらにそれを明らかにし、カエルに関しては初めての経験であった。

獣骨については、シカを除いて、その他を確認することができなかった。あまりに骨が細片となっていたからである。しかし、おそらく、それらはシカ・イノシシの骨であったであろう。そして、何か意図的に骨が焼かれることがあったと考えている。

(註) 清水端遺跡第2号址より出土した骨片の鑑定を金子先生にお願いするにあたり、炉中より出土したものは炉址層土層位別に3つに分け骨片を取り上げ先生にお渡しした。また本文中「石下」とされたものはが塙西側敷石下より出土したものである。

# 図 版



1. 遺跡全景



2. 調査風景



3. 調査風景



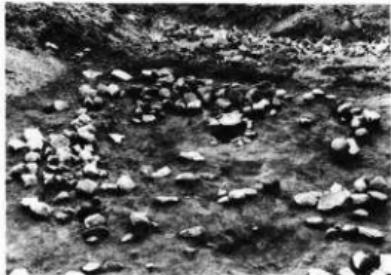
4. 第1・2号址全景



5. 第1・2号址全景



6. 第1号址散石狀況



1. 第2号址全景



2. 第2号址全景



3. 第2号址炉址



4. 第2号址敷石状態



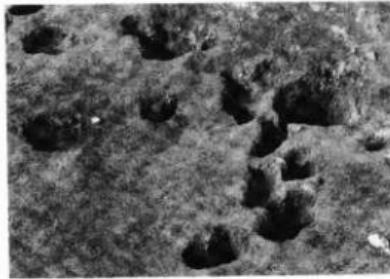
5. 第2号址敷石状态



6. 第2号址九石出土状态



1. 石列除去後



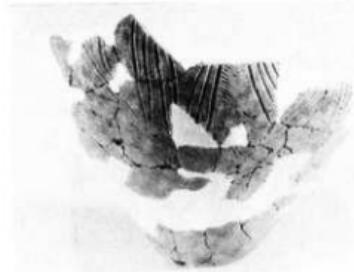
2. ピット群全景



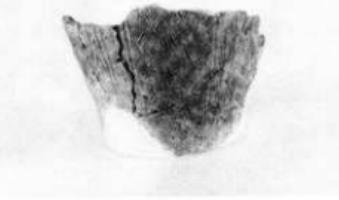
3. 第1号埋設土器出土状態



4. 第2号埋設土器出土状態



5. 第1号埋設土器



6. 第2号埋設土器

4



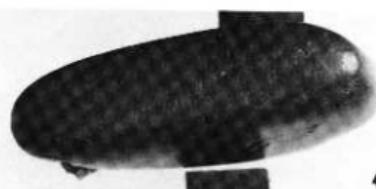
1



2



3



4



1/100 1 2 3 4 5



6



7



8

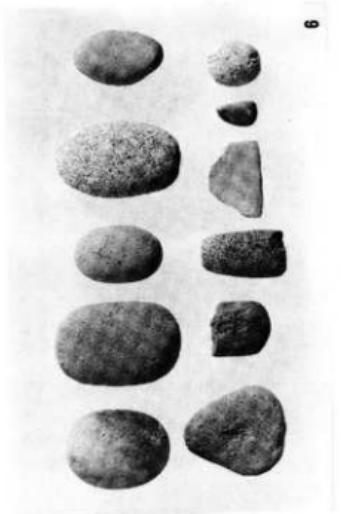


9

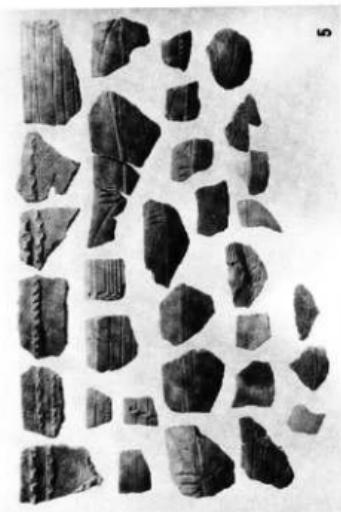
1 ~ 5 第 1 号 址 出 土 遗 物

6 ~ 9 第 2 号 址 出 土 遗 物

第2 烤址出土遺物



6

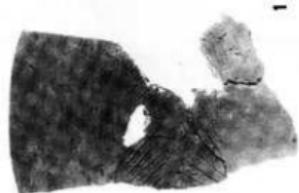


5

3



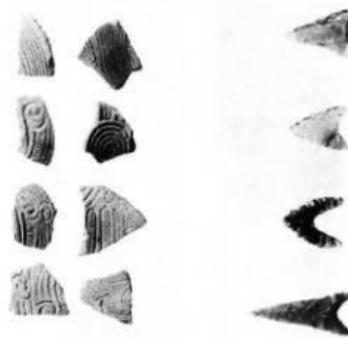
2



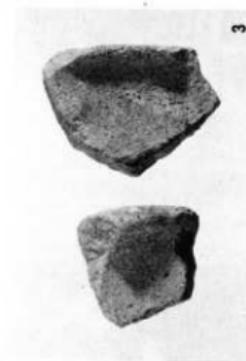
1

4

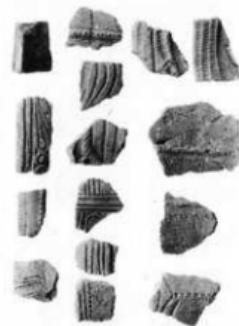




1



2



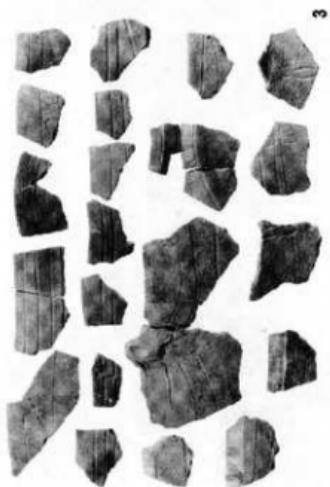
4



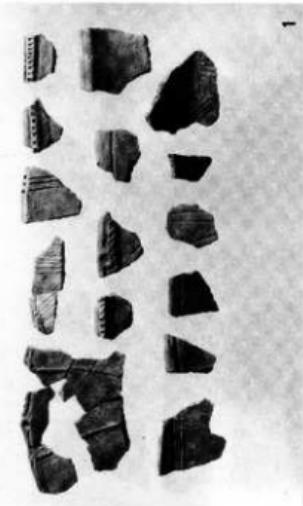
5

1 ~ 3 第2号址出土遺物  
4 ~ 5 遠構外出土遺物

遺構外出土遺物



2



3



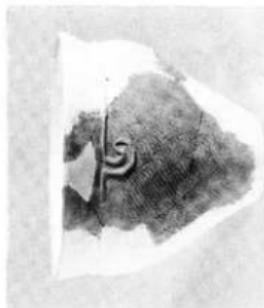
4

遺構外出土遺物

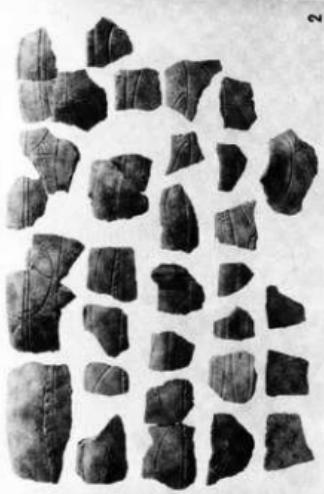
5



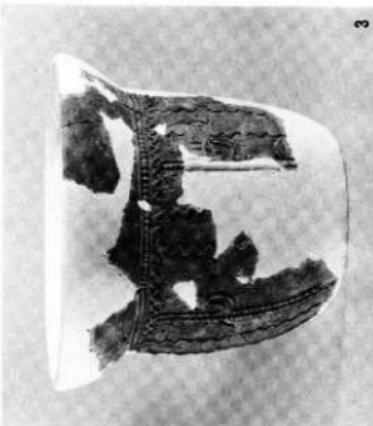
4



2



3





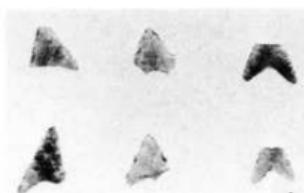
1



2



3



4



5



6



7

遺構外出土遺物

昭和61年3月25日 印刷

昭和61年3月31日 発行

明野の文化財 第1集

清 水 端 遺 跡

県営面場整備に伴う埋蔵文化財調査報告書

発行所 明野村教育委員会

峡北土地改良事務所

印刷所 (株) 峡南堂印刷所

